拘法
拘法

真海堂

一休教戒以歌

い

ろ

は

に

ほ

へ

と

ち

り

る

を

わ

か

よ

た

ぬ

れ　つ　な　ひ　ね　れ　や　け

ろ　ね　ら　う　の　く　ま　ふ

赤染右衛門は……赤染時用が女……[illegible]

○後拾遺集 [illegible]

大弐三位は……宣孝の女……母は紫式部……[illegible]

○後拾遺集 [illegible]

こ [illegible]

て [illegible]

さ [illegible]

ゆ [illegible]

ゑ [illegible]

わ [illegible]

き [illegible]

め [illegible]

右大将道綱母　右傳ハ倫寧の女　東三条入道兼家公の室にて [illegible] 三人の内 [illegible] 蜻蛉日記と名付て世にもちゆ

○ [illegible] 入道摂政久しくまうでこざりける [illegible]

なげきつゝ　ひとりぬる夜の　あくるまは　いかにひさしき　ものとかはしる

み [illegible]

忠 [illegible]

も [illegible]

す [illegible]

し [illegible]

ひ [illegible]

せ [illegible]

京 [illegible]

安嘉門院の四条 [illegible] 為家の室 [illegible] 阿仏と号す [illegible] 為氏 [illegible] 十六夜日記と云 [illegible]

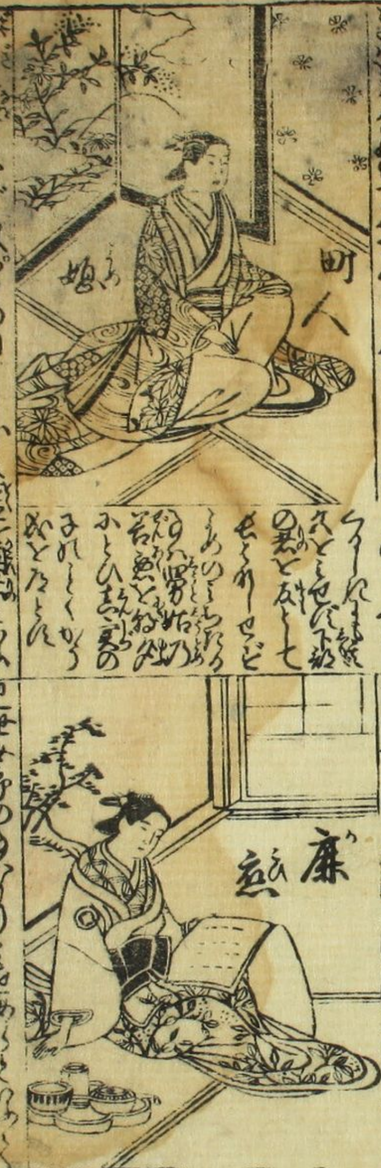
[illegible]

公家

武家

ちまき

天職


町人

妻

庶民

端

茶
湯婆
比丘尼
後ゆ打
蝶姫

忠孝五欲の圖

女教訓寶草

ぬ一代の男とおさまる家とてしのぶ[illegible]
んしらたくのわりへとそわりのなるゆゑし

▲[illegible]ふちろうあいぬ[illegible]なり[illegible]賢[illegible]
ちゐとも[illegible]かさくかゝれよ[illegible]
ゆ[illegible]ふとなかいかほてゐ[illegible]
んとろ[illegible]てんのあやまらといりふむいたさ[illegible]
つすよれるとゐはもおりさうとゐうくすゝしわさう[illegible]
ゆりりぷゐるもつうゐりでなゐ[illegible]
ゐうもつゐざるかるとうりのくもとゐ[illegible]
▲親[illegible]ふうく者ゆとはくとゐ[illegible]
なうる親ゐひうるさ[illegible]
す親[illegible]
大不孝[illegible]
オ二の者ゆ[illegible]
まとあいとるこゐ[illegible]
親[illegible]
ゆうもそ[illegible]
しまい親選なる[illegible]
とれ[illegible]
紙[illegible]

▲妻女のこゝろ[illegible]
なし。妻女なれ[illegible]
くしゐとゐ[illegible]
ほひゆそれて[illegible]
ものこゝろ[illegible]
家老とんよにてさんで[illegible]
ゐよ者ほるゐ[illegible]
▲ゐぬ妻あなれ[illegible]
んふとうくとゝせ我いや[illegible]
なうゐぷゐ[illegible]
一同ふ孝ゆなれ[illegible]
▲女の姓いみるひ[illegible]
ゆ[illegible]
我かんなうゐ[illegible]
ゝへゐいゐ我ハ[illegible]
いゐゐ[illegible]
ゐとうさくゐの[illegible]
とひく者の我[illegible]
てゐいうゐ[illegible]
ゆなうゐ女の性[illegible]

▲女房ども流行せし新の若衆をとらへ、べつ〳〵に家友よりの若衆をとらへ、べつ〳〵にかうひらるゝわれんとは出てまゐるなどと、こゝにつ人の卑賤病とおもく癒治ときゝ、ひとつ〳〵ぶつ〳〵ぶつ〳〵ぶ

▲人くうわとすん附よ我又わさはくるすの一ぱうとこの恩うて難ぜべーぱそんみ丈こそ
難ぜどくるゆくおそのあ若難ぜをたぜ天ぐうてくうずかしいつり方の食こそて
▲方のの十分なんでこりをゆくぜいをさらひてこいつり方の食こそて
ゆかいこだたくさうわれでこれぜ病ちくんかとあ若ていこだくくこかぶのつろん
飯へわくうてかむ久ーくあまかくく病ゆも怒りそしほ治せんとすんくうかのよ
くくくかせぐべーぱそこうかいかもとうてほぱゆさめんとせんくるそこ絵ーしーし
▲食いつひかすかく嗜ハ脾胃とやーかんく絵くうとひぜ命ぱ食ハ溜れ
てみ藤の長ーなくうだくくいの今欲いの飯ーしかぜ欲ハ飯とたをくるうごくー。
山椒と多くくうでまん丸と飯ーしかぜ欲ハ飯とたをくるうごくー。
多ものすんでくうねゆくくいの人ハ多ものすんでくうねゆくくいの人ハ多ものすんでくうねゆくくいの人ハ
いへ飯ーくゆぜくーー一切の飯りめとんかつて嗜ぜくーみひ多くくうひてもあくうー
ぬかくぜかのくくくこと妻のわくくるこ同ーもく湯天山のくぜふかんくくうすくくめ
▲くくくく

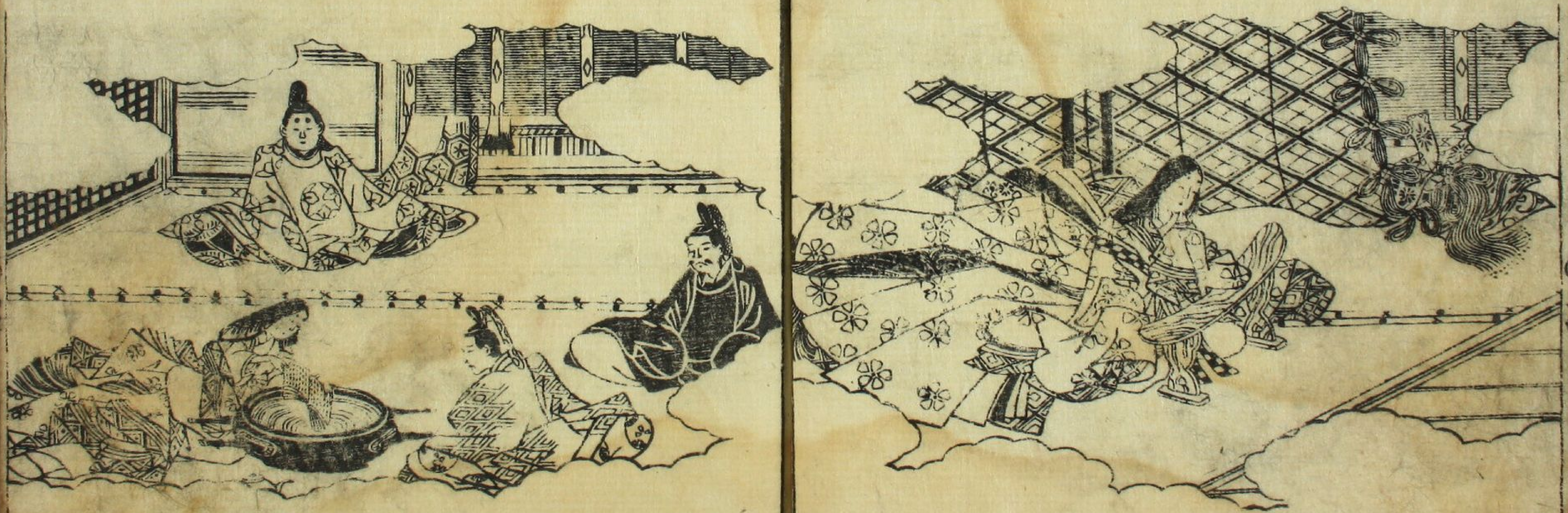
小野小町一代由来 七小町物語

七こまちのうち ○さうしあらひ ○そとは小町 ○あまごひ小町 ○かよひ小町 ○あふむ小町 ○せきでら小町 ○きよみづ小町

小町ハ小野[illegible]がむすめ也[illegible]出羽郡司[illegible]の子也[illegible]
たゞひとり[illegible]の[illegible]七代[illegible]の[illegible]
小野[illegible]ハ[illegible]小町[illegible]
[illegible]小町[illegible]
[illegible]歌[illegible]
[illegible]世[illegible]才一の美人[illegible]
[illegible]
[illegible]文の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]小町[illegible]
[illegible]古今の序にも小野小町ハ[illegible]
[illegible]衣通姫の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]小町とそ[illegible]
[illegible]小町[illegible]草紙[illegible]
[illegible]

「草紙洗小町」

むかし大裏にて[illegible]歌合[illegible]
[illegible]小町[illegible]大伴の黒主[illegible]
[illegible]小町[illegible]
[illegible]
[illegible]小町[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]万葉集[illegible]
[illegible]紀貫之[illegible]
[illegible]
[illegible]小町[illegible]
[illegible]万葉集[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

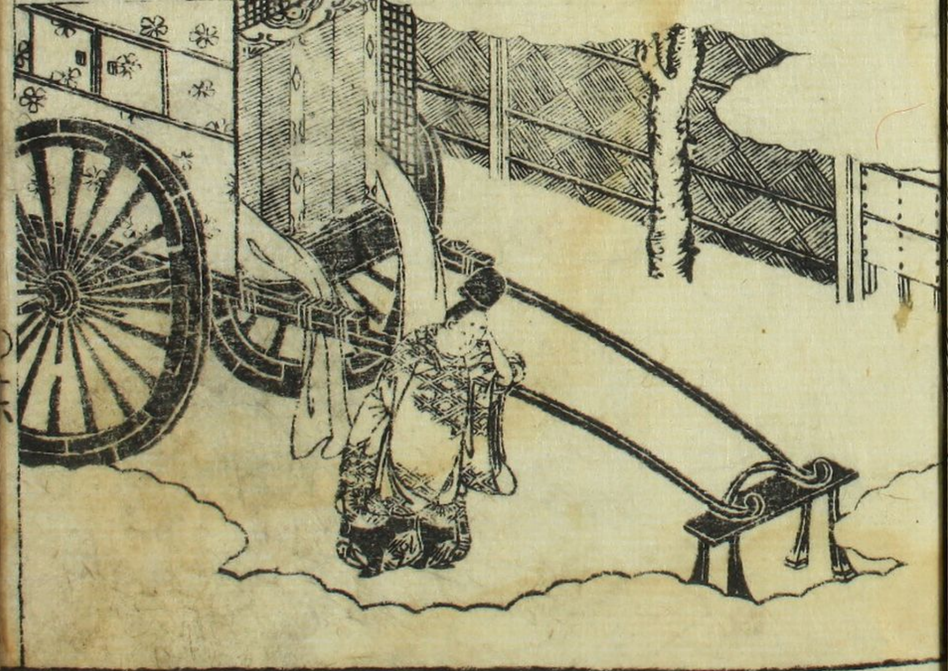


面こひ小町

紀貫之の古今の序に人の
[illegible]のひづつとのせられたり小町
[illegible]

小町

小町は絵あるいは[illegible]
[illegible]



関寺小町

業平ころ小世のならひに僧が問ける、むかしの花の身よりうつりて衰の末とはなれど、実ちの跡をふてふ[illegible]、とこしへのひはんくどふ[illegible]小町とは云あへず[illegible]、よろのせ月七日せきでら[illegible]住僧ちご達とつれだちて、ふむけの[illegible]女は哥[illegible]をおとめ、たくさんと[illegible]のてなひとれ[illegible]小町は云ぬ、あらぬこは[illegible]き[illegible]そ[illegible]と云かけて[illegible]、ましとやせ[illegible]代より[illegible]おさめ[illegible]、[illegible]文母なりつうし[illegible]か[illegible]僧達へいでゝ、女のおかましなる[illegible]女のあたりのためをとくすゝめ、仰かて[illegible]あせこうくべき[illegible]の[illegible]、ふつまひ○[illegible]と[illegible]○ら[illegible]小町、舞へでその衣通姫の[illegible]まゝ[illegible]、ろうくれと僧[illegible]て小町[illegible]衣通姫[illegible]、是ハふの[illegible]と[illegible]ひ[illegible]僧のまへ[illegible]て[illegible]、衣をふかわ[illegible]とあそび[illegible]青と[illegible]、それハ文屋の康秀が三河の[illegible]下りし時田舎にてむ、ともみさそひ[illegible]しと[illegible]、それ僧[illegible]僧めおでの[illegible]と[illegible]、小町そ[illegible]とほ[illegible]たひけのおしとす[illegible]

そとは小町

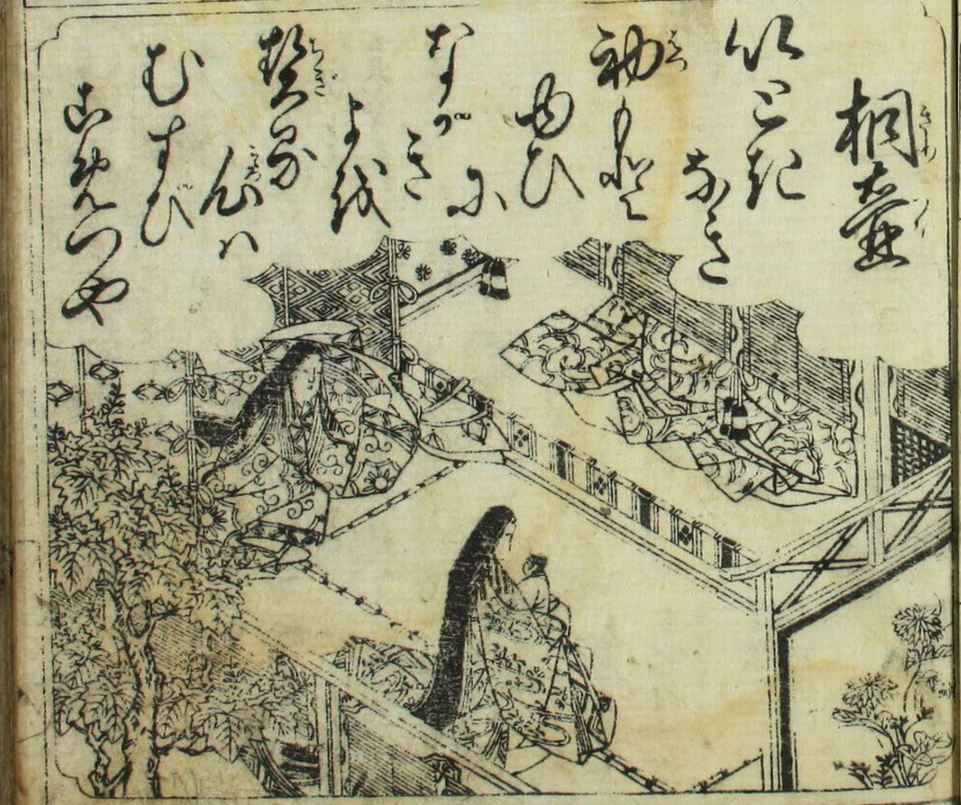
小まち百とせのうばとなりて、おとろへおちぶれ[illegible]、うき世のわかれにまいらひしおり[illegible]を[illegible]、命とつなぐたよりとし[illegible]おり[illegible]のひかりさりし[illegible]、実れさり[illegible]と[illegible]と入りて[illegible]、[illegible]を入り[illegible]仏[illegible]のふくろ[illegible]よおなしさ[illegible]家を、入りおひ[illegible]の中[illegible]中なりくらに捨ひきちら、[illegible]てゆく[illegible]行の[illegible]なり[illegible]を[illegible]の、[illegible]とを[illegible]て[illegible]、[illegible]の僧うち合せてみへる仏前とさゞめる、そこにかなりけるこそ中[illegible]ねふみけちの[illegible]、申しやうりて[illegible]おのかひけんの[illegible]体[illegible]く、も仏のすがたとて実そしとなしたれど小町[illegible]の、[illegible]らく[illegible]と地水火風空の姿とあらはせると、いへるはでふかも仏神となられり、つてその[illegible]、今ここまで卒塔婆[illegible]の[illegible]と[illegible]さくら[illegible]、僧ハ大[illegible]小[illegible]僧[illegible]にて[illegible]、三度礼拝をしいる[illegible]の[illegible]向[illegible]小町、小町そ[illegible]せ[illegible]僧の[illegible]やとて[illegible]、
㊄極楽の中なりてそとは[illegible]、うくぞこの[illegible]なりくなり

『わふむ小町』

湯成院のこがごのれこれはさう
ひたちさーまのたとうのまもあと
まうしとぞ流つ　ひのうめくくわまこれ寄とまもてう
ろれかもいまぞ流こ流　よるの春の春流かう寄
ま小町　八百しをつ　うとこかりて実るの名んよ
わつうし　ことうあさんかの色ろるびなさ　あのこども
なんむおりしろさるどもやわんどもんとあのよ
とめぐこれかのれわろれこの寄とてうれをてんろれ
こうてかこうとぞとてさんべさこのせんにたう
ちくくい小町のいかりかてうぞとしむことのぐれ
れわれこのmせいとちんさうくそれは寄よ
国　寄のへおり　寄かろうねどろてあれの間ややしむ
小町ろこくくこのおりてこかのれおそうみくしれ
てぐうりのおりしまの逆あとれふまうべーそ
国　中これいうむりれうねどろてまれのうちそのまき
ところみうりはきちらくしもたろうんしもんろ三十ま
とうねとふんのうねうもうろふやのとあうこいかそ
流かあだくあうみくまりーあれていよりかのうやわうと
流るんろんろ小町とてくけきれとよんていとのおむ
へーしかり　抑あむしといかるいうろうれ寄るやくくの
紐とうつり流そとえ行ぞことよぐれば逆寄とも。
ものむなりくそやうあ

『清水小町』

小町いうてい流ろくあ
てそ流のこうふ流まうとくあ
陸奥の国衣の里の上人流逆あんぐやあろろ流　加流ろ
ちかうんりかーうのこーのすこうあ　ちあのうれいうり
てなるまとうれ　おくく流やい寄和の流やくとあく小町
国　何ってそ分の流まそれろんん流のまそれいろうとぬりめと
とう加のはーうとれ　ひさまうんあううさて流れうろ今
ののいまえていうりくなってうしどれうりんろんうりか
さんれ寄まてれまちのゆうまいろうぜんうてあうう逆出。
やされ流乃れ流やうみそれーどうけ　あう逆はうう八
をそく流　わくれはさう流なるそれまうさ寄りう
寄くーあうこふ小町の流れなりわうまうこうて
わくとまうろうひまへうーとあうけまそとう人うろうこび
それーそ寄そううのそこあくゆうみちうまくーて
ものひうあうとあうて寄おいうりまこそふ小町のつう
寄くあうーませうくくうろうひうあうてうれそー
て失おうりうう人そそふ小町のゆうまいなりうろうそて
いうくくうんういうまうめりーうまうすーくれ流くく名
しーまうくれれ逆とのうくく金流ま吊ろしーうさ寄の寄ま
小寄ーー小町は流ろ逆二人れまれ果あて寄んうのうれうろ
あうそーーうんーうさの寄りうとうろりてとうりてうま
とひうさりうあうふとうまうりーとうろうれ流寄りう



色紙短冊之書様

同寸法

竪 大の寸四分 小 六寸

横 大 二寸 小 一寸

此色紙の長サ 三尺五寸

○色紙の長サ二寸五分ヨコ一寸八分

○短冊長サ六人の長サハ一寸九分八合ヨコ一寸六分

○本人短冊ハ長サ一寸八分ヨコ一寸六分

△短冊ハ寄せ書のうち三つ折にして三つ折の上の折目の二字あるを上ハ七分わくなる下の白紙上の白紙一字あきて書とて頭上の白の頭と同じ名の二字八分の白紙に一字上ヨ

○折目の一字上ヨリ書し

みのくとうらの松蔭
ちゝまつかつしかの野せゝ

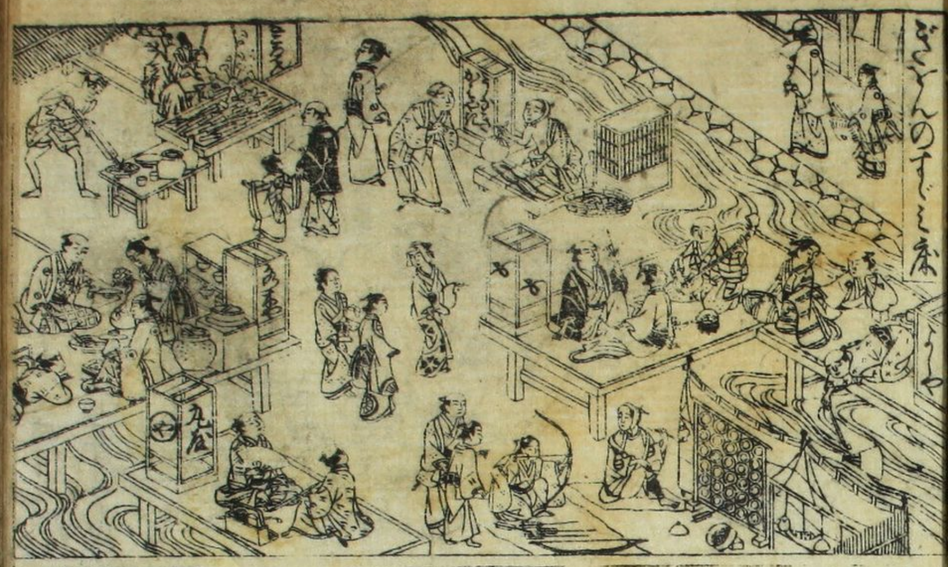
○紙背寄

我ものを思ひてぬれし
ちぢのたまとぞ
ちりしける

源氏六十帖目録

第二十六帖
五十四首

せゝらぎ
絃わりせ
松の緑
すゝ
鶯の
ゆ
ゆ
ゆ



たて書く

いまいにおの相とりくくるつき
法そ行わ
乃りくへ
いふを法使
之のさ
その時
らでそ
ばかのたて
の法に
くよわ
られ
わくあ
と見ひく
しらせ
さにわ
ぬとや
わ中

四条宮所乃条ようあり

○山国郡八ところの
画業聖泰の
長か

おとこ山にて秋中ふ函谷こ
いふ関ふと西り鶴のまゝとして
雖ことのごとくなりなすなり

本能山

久条坊門油小路乃条

○北山九つ
仲西れ斎こ
ところきうこれくゝ山乃おのこ
みゝれ乃ろ秋のとれ月

西京山　長兄四条ふ

○信こ算山
北山の八二十四孝このそ
こ長ふ孝行ゝころて長れたおゆゆ
竹のこ
白馬天山　宮町西四条
きて南松谷町ゝ
乃林林所乗と
ゝくゝのてん

第弥陀　宮町四条乃ようあり
○北国郡八曽我長房ゝ
生小仏こて九月九日に
赤
袋ふ菜菓こ入く
ひちふゝ
第花の酒こ天ゝ
花天神山　綾小路新町の東ゝ
○北山八黄金相ゝこの
大宰府ふ
対石里乃相ふ
れ泉ふ梅ゝ
蟹蛸山　西洞院四条の東ゝ
○北山八蟹蛸ゝ
ゝとて五車ふ
ごゝとの
のゝ
芙刈山　後小路油小路の東ゝ
○北山八芙ゝ
里ふ
人ゝ

うゐせみ

此巻ハ源氏の物語とかゝれつゝ
なれ。源氏の十六歳乃夏のゝ
うゐせみの元乃つまゝ
せこ乃弟小君とひ川
りくゝ
ゝ
ゝ

月作
四条新町のあかり出
○此作ハ
ろうの月也
傘作
綾の小路
新町のあかり出
○せんだんやしれ
出さかこしの
そもそも三月ハ
あやすのまたと毎○出
鄙巨山
信ふ金りのふとり
四条西洞院の松ふの小出
○此山の図絵ハ
鄙巨らの十人出る者
外此九ふまとぶ
金の宝ことり物せしおなり
石出山
信ふわのひとり
○祇園宝殿こうしゃ
ふのちの内わ四条ふ人出
ゆふ
此書ハ祇の祠とのつくるあと
せり源氏の十六帖乃ゑとう
十月まそのこゝ紙をそこに源氏たゑのくやに石
わもんゑ出ひそかりひのふ乃ゑ乃ゑどみまわさり
をとりまふにちいさに家よゆふかゑ乃ゑたのさき
うろふ紙なふの花うと用ゑこん。四ふわ白き
まふ八ゆくたきゆの旬ひわこに家とゑてゑて
まつ八ゆくふゑうゑ出ゑ家ゑうろ白ゑ家の花
ゑつゑうゑ乃ゑたの花に紙ゆハとしゑわくふ源氏
乃家ゑわくまゝ由にゑとゆいつゑやうゝゝく
ゑれとゆうゑ白の花乃ゑもひとゑ白ゑとひ
ゑふゆゝゝいふゆこしゑんゝゝのこゑゆにゆゑりてゑて
ゑうゑこゝもこゑたうゑ出にゑ乃ゑくゝこん白れ
ゑたの夕うゑ白。紙ゆハちゑくへゝわゝくゑう信ゑも
ゑわくゝゑゑれようゑくゑうわゑて夕ゑ白ゑさ
ゑゑうゑ白ゝゝんゑゑわ。ごうくゑゑゝくゑゑゑと
たゑゑゝゝいふゆこゝうゑゑとわくゝかゑひゑふ。
源氏のゑゑゑゝふゑ出ゝゝんゑとゑれゑりゑゆの
ゑ家乃ゑとゑゑ所の場んゑゑゑゑゝくゝゑて。
ゑほのうゝゑゑゑゑれひかゝくゑふりゑゝゑと

わらひらさた

はるとなりてはるのかすみたつ
源氏十七帖乃二月ニわ海の
はるのくにに女あるかたちとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ
ひとりとおもひて源氏おもわとうつくしひ

鍾山　室町六角の南角

○けんぎょうこれ
つくりもんの飾り
紙ばりのやまもろこし

八幡山

新町三条の南

○源氏ものがたり絵
巻八まきの表紙ゑ

紙巻山　新町六角下町又四通り
四条坊門下町ゑ五町うり
陽年よりを

○紙巻の像ハ
二位尼が懐剣の
像紙にて作るなり

鶴亀山

三条室町の西なり

○けんぎょうの表紙の
てんどうろう

舟鉾　新町四条の
南より出る長式
七月五日

○此舟鉾作りは
ちりの母かいな蘇の
出陣十四日はかり
ゑ蘇とたつ

ぐすひして
飾なりとよ

▲紙巻の像ひしゃ鉾左一条山百八十四ぞうぶ
たりしこさすのふりうり近世ちりふ山鉾九
三。十四日ふ山十ぶんと三十三ありといへども。
ゆひたりしこさすハひしゃふりうどあれども
十四日あり也ちんえ月晦日乃祇園ちゃ一ちゃ
四条室町の巻ふ山ひすりてあどそ紙巻
ぶつ除そ附たちのれ俵えぶ四ぶ八級地灯
とくこう。紙巻を町とんそ名ちりとゆ名のは
すこ代祇園とゆ数所ゆハ去年九月りんの
そ夜秀ちんの祇河改て室町四条いまのはひ
ちゃ八は色なりゆ。六月ちりあるゆ山鉾町人
六角学ふ集参ーてこうとくりこうく
まりりのぞやうれつをりぶしとうて

六

「よつひ花」

月ちわ八の年乃ちまくのことわつ。まつむ花と
やいひくちりゆ乃ちゆやとーせーその法ひてあ
かけっかりゆ作ねあく居ちひーと。源氏すつえ
ゆうしくぶちくくちりゆ。くくっちりまつしひ
ひめこやちゆちりくゆ髪おぐくちふたりく髪ちん
されわくくやせちひて。ひうさくくちゆ。されて
ゆへに源氏乃法ちふハちりつーれちくちゆかよ
なけくひけ。ひとへつむ花と神よゆまとくん。ひひハ
まつむ花ハだれのちんとてくされとつむものし
ひひちゆやのくれのされわくさ紙紙の花に
くくちゆくくしくれのちゆのさ花とひて。
ちりひめのにやうにくちわくさんくと。
仏のゆうーされわひゆまちんとちのゆくちわ。
ほ面にちうにのとちんてゆ立んちの果つゆく
花のちていてれた。源氏ちうくちのひちわ
ゆしんちみちふ面しひまちのむいくへまくく
くくちゆまつくくくゆむくちへぶれうとうゆハ
くれまくくまちのゆよひまとちへし

もみぢ狩

十八果の七月さそ[illegible]
[illegible]しもせ月なれ[illegible]
[illegible]と[illegible]天子[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]
[illegible]

「花のえん」

[illegible]

[illegible]

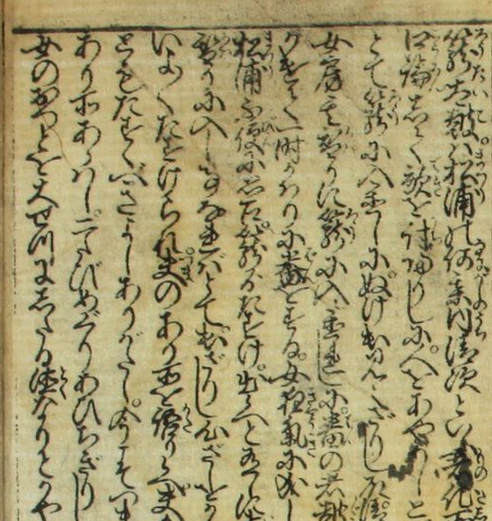
[illegible]

道成寺

鉄ちく敷

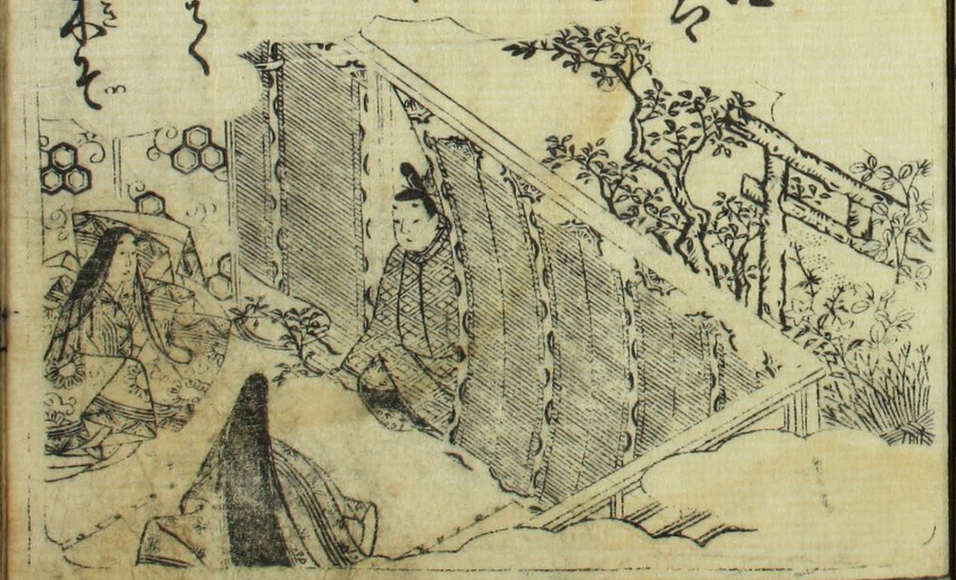
あふひ

ひもとハ紅とゆくゑあつまさうし
源氏ハ一巻よりわ五二まきのす
まりとそに紫のふよ清車のうてといふかもの
人くわうそひて玄象のこやひ所の清車とうち
そんじ琴ようわ。かゑ乃まつわの車わそひ
とらふしそのうらこふと乃きとなりてあふひの
うへそのうらこれハ八月ふうわゆうさまこのふしいかもの
まつりと乃日源の内侍源氏よりてうてまつる紅
むらかーやんのうぐゆるあふひ四へ神の三角乃
ふとまちくく。ひ公ハその日くんーハ紫のうへと
同車そしかなひてくれとおふひとわ月ふうて
くふたよわそんと神のゆうーとまちくくよ。人
ゆく同車ふゆ、にくふとまちーひもなれ
ことなわとうわと。くんーの方にへうわふさ
ちひろ乃うあの乃くふされ四ひり来ハ紫のそ
そうん。ひ公ち紫のうへの清くーとうとゆ。
清くそのうふうさハくくさーくふ源よあり藻
のごくくし。牧ひうへいうんうわふくく四ひそんそ
ゆく来いくんーのそんたゆんそのひなり



鉄ちく敷

柳



松の山焼

松の山焼とは、能登の国、松の山郡よりむかひ
そひの浦一面の海にて、月見はわりしかひ
ひ母むとあり。其ゆへは、海一面のうらんかんとして
海ーーー

正儀世寺

正儀世寺は兄弟人にて兄を弟と世にもてはやされ
ひとへに弟の力なりのいとをしがりたまふ
くらべたんの大臣をもとより弟を
やもくくと討なをしまつぬたうふ法とそ
ぬりくくと討さらんれたるのぬ法かまをそ
弟二人とかくのそこ役人を宣旨下り申の一文
ふ様しゃせーの中をそふ討加もまり
くまはたらかうとてかんとする西安人
かんぬのすいとかのけまうはるきのトハ号。
まどもふれ付法のさん役人をめていや。
いかんぬのとそんの音のたへ参りけるに

明石

秋の月

法紀の

音の

海

わ

ふれ

ねを

き

海乃ま

雲

ん

女

ぬいかのやうにそうもてーとはしよ様し
法のそさまびんたれいかの月表まのび
のの大臣敵と討さら神かうり様とな。
すてそ大臣敵いかもしらあるの紀のかてん。
歌と討さらおびバ渾乃臣とうゆるとうてと
ヤたんのトわ役人とうてそれいさかり
なれーもしらふの大法うてくと討さう者を
たとけぬ法よ安いやーく討さう者となけ
ぬれ法なくべかもてくらいに討ー大臣敵と
ばーとそかまでいさことけのかそでそれいそまハ
大人見ハ小人いてでそ月みさいとべさ安まさ
いのやーさと歌とやーかくんいかまくらいや
ちくさ出られんいそーちとそくまの人とせ
ぞとそ出るる法なまたバ月花なーえ安いやー。
大臣敵ハ二人討法ハいいかとの役人
とそ乃ぞかのせうりくさーバ月オの用人とけん
とのでは安かやー。我ハ法ぞくものの安なり。
月オのまのうりふ我とかくまくといかと。
ちりいかるのずもくんのでもくるもくーと
いかんいのもまでずいでーふかーもてたいい
ふ死とあくそひーかんの正儀いかやー。我が
いかうとそとむくーふ法なりくらい世ちさく

仇廣

法氏ハ月表乃秋こうりた大果
乃表ハくくとこそ法。法氏乃法ハん第秋法
信の時ハ表乃秋こうりた大果
月表の西海乃ぞいとをしがりたまふ
くんしの秋こうりまわくぬりくくとこそ
法こそもまくくんしハこいうりる法
まわくくハこしの表くいつるこ。ゆに所こ
とうりるふ法歌 うたりるいせ秋のわこ氏
号ひやまもしハるてふ海のうりふくく。
ひんひいうくうりいせ秋のあまてはいせまふ
ぬへなわ。ゆさひらのりかれつくりまを
ちくくハこの海そ。その法ハわるとくる
やれりこの海とのむし。そんしのハ西しいせ人乃
法のうへあぐくりまもうくくわくくらそのらほし
ものをハひいせ人法くもしたくく法のとくく
あうくハ国よハわふまーハ海をとこ。ハまくく
原氏の秋こうりくくひとくをし

百人一首

[illegible]

百人一首ばくしゝ

△秋きぬとめにはさやかに見えねども
風の音にぞおどろかれぬる　太上天皇

△君がため春の野に出て若なつむ
わが衣手に雪は降りつゝ　光孝

△あしびきの山どりの尾のしだり尾の
長々し夜をひとりかもねん　柿本人麿

△田子の浦にうち出て見れば白たへの
富士の高ねに雪は降りつゝ　山部赤人

△奥山に紅葉ふみわけなく鹿の
こえきゝときは秋は悲しき　猿丸太夫

△かさゝぎの渡せる橋の霜の白
夜ふけて見れば更けにけるかな　中納言家持

△天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも　阿倍仲麿

△わが庵は都のたつみしかぞすむ
世をうぢ山と人はいふなり　喜撰法師

△花の色は移りにけりないたづらに
わが身よにふるながめせしまに　小野小町

△これやこの行くも帰るも別れては
しらぬ逢坂の関の関守　蟬丸

△わたの原やそしまかけて漕ぎ出でぬと
人には告げよあまの釣舟　参議篁

△天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ
をとめの姿しばしとゞめん　僧正遍昭

△筑波ねの峰より落つる男女川
恋ぞつもりて淵となりぬる　陽成院

△みちのくの忍もぢずりたれゆえに
乱れそめしわれならなくに　河原左大臣

△君かあたり見やるまがきの草なれば
露のいのちは惜しからなくに　光孝

△あきの田のかりほの庵の苫をあらみ
わが衣手は露にぬれつゝ　天智天皇

△春の夜の夢ばかりなる手まくらに
かひなく立つは浮き名なりけり　小野小町

△夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを
雲のいづこに月やどるらん　清原深養父

△白露に風の吹しきたる秋の野は
つらぬきとめぬ玉ぞちりける　文屋朝康

△忘れじの行末までかたかるべし
今日を限りの命なりけり　儀同三司母

△滝の音は絶えて久しくなりぬれど
名こそ流れてなほきこえけれ　大納言公任

△あらざらん此の世のほかの思ひでに
今一度の逢ふこともがな　和泉式部

△やすらへ花や散るらん
みねにたつ白雲かかるたびごとに　赤染衛門

△あけがたの月の中にて
ほのかに見しかの面かげ　紫式部

△有明の月をまちいでてうつるかな
山の端にのこるかたぶく　大弐三位

△あらしの山の風の音に
ひとりぬる人を思ふ　左京大夫道雅

△ながらへば
またこのごろやかくしのばん　和泉式部

△思ひつゝ
ぬるぞ夢とは知りぬべし　菅原孝標

△あけがたの
ほのかに見しかの面かげ　紫式部

△ながらへば
またこのごろやかくしのばん　和泉式部

△思ひつゝ
ぬるぞ夢とは知りぬべし　菅原孝標

義

△夜のあけぬるかとつゝ[illegible]

△[illegible]

△郭[illegible]

△[illegible]

△[illegible]

弟とつくし

いまをいにしへのことをとりつくるに[illegible]。

[illegible]八の[illegible]の十一月[illegible]のことなり。源氏[illegible]

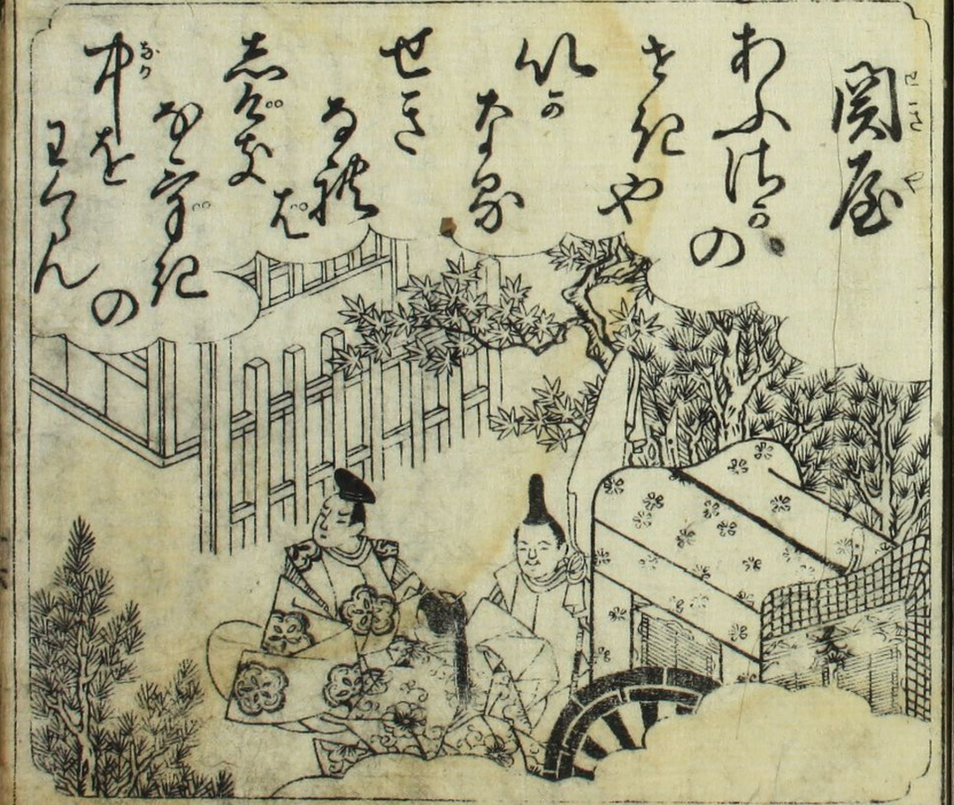
[illegible]

[illegible]

年中行事

○正月○元日
一年の上月なれば
上の天地の方ねと
ふくのれまつ
ごとをひかれ
百氏ふりてを
礼をまつりて
しれをわ〜く
くの安泰を祈ひ
行ろ○十日清水
今宮ひすまつ
○十九日八幡尼社
まつり○二月○
の日法人つまり
法教祈祝ていのり
ゆろこれ大福祈を
りんそ宮そこん
ちのと祭り行ろ
○二月○七日祭
良彩の祭まつり日
二月堂に九行ろ
十九日四天王寺

の西天王寺ぐく
らくおねん祭る
○正二月月天王寺
参り奥金ろのざい
中くに人の舞わろ
○為月初午の日八
伝人いろ祈祷
まつく行ろ也を初
午まつりと云
○三月○三日雛
祭の祭ろ○桜別
行ろ○ちのひまつ
り彩ろ人びとまつ
月かもの安まれの
祭○十四日まれ
会れ月しねこ
○五月八幡宮
祭ろ人作ろ也ごと
○十九日祇園せ
ろまつりの日ねぐ
八○十一月ふるに
ねるこ野ろ弘法
大師忌れ祭○正月



代まで初とかくあるにかくし。源氏九八才の九月まん
すこ。石山へまゐてまゐりしうつせみの君は。
つ面のひとちのかたちにつくづくかしこう。
ばくひい又ついくのかたちにて。せさひてあひ
そひしうえん。むりのこと紙ばかりにて。貴乃
小君がまらくらかに。思ひくらみわりあり
むくらくんにゆさわくぐしくものこしもち紙
らひなしやうなりぬうえ。ものむとく
らくんはたあさくし。あつことはひあつぐとふを。
たのうに。こづうこいたあのさまぬうえなれて。
なるめとはいふ男のあさむく。あひくる事乃
よしぬよりのむし。うつせみ乃こしま
あつ坂の関やいかなる関なれくたぐれたなるぞ
その中とまとくん。ひむはあつ坂の関いつ
なる関なれくまらりあくくうくとものはりひ
みくくしまをうくらつむしあつ坂とあひ逢
をうこ。あつこれせさとあくくく坂のむくくち
ちけさ。ちくちの神とうげて逢ひまとくし

○八月○三日
○天神祭○四日
○十五日吉田祭
○九月○四日
○十八日
○十二日
○十月
○十三月
○十八月

○七日ぎをんの
○十月ちやん
○十四日ごとに
○十二月
○九
○七月○
○九月
○十二月
○十二月

名わとせ

流れたる○鳴る堀
伝右衛門送
○十月○二日
今日土ろとちゝ流ニ
海苔○三日ひる
いとゝ元三天神の清
祭○中二ケ日も
伝宝院のゐ十月
八摂州ゝ五番ニ
わんちとる和今ゝ
うとゝ九ゝび○五
日夜戸ゝ○今ゝ
ゝ十ゝりと海苔
ゝるゝ十歌乃ゝ
ゝ伝ゝ十日
真福ゝ雅ゝ
連ゝ十三日
連ゝ十八日
す海苔松屋家宮
着船の社せいん
ゝ○十一月○八日

まつゝ勢

はゝ
ゝ
ゝ

一のりハ○のべ
一さげハ○さく
一かをハ○ひで
一らさハ○おいろ
一かりハ○かりく
一たこんハ○かりの
一わさづけ○わさく
一ごやくハ○こん
一ゆの○ゆ○うく
一くさハ○くさ
一竹のゆハ○さけ
一うこぎハ○うのめ
一ちろハ○おつけ
一さいハ○おうず
一ねぎ○ねぎ
一ゆずの○ゆず
一くらハ○おさら
一すしハ○すし
一いりハ○いり
一ろうそハ○かく
一ゑびハ○ゑび
一たこハ○たこ
一ふなハ○ふな
一すりこぎ○ふがし
一きく一ぶ　○百ひき
一ちやくし○ちやく
一せふ百ハ○一ぜ
一くんなん○うんなん
一かこ○ろう○おけこん
一ふなにいも○ふなにいも
一ぬりこハ○ぬりこ
一まつさり○まつ
一せりなハ○うこのす

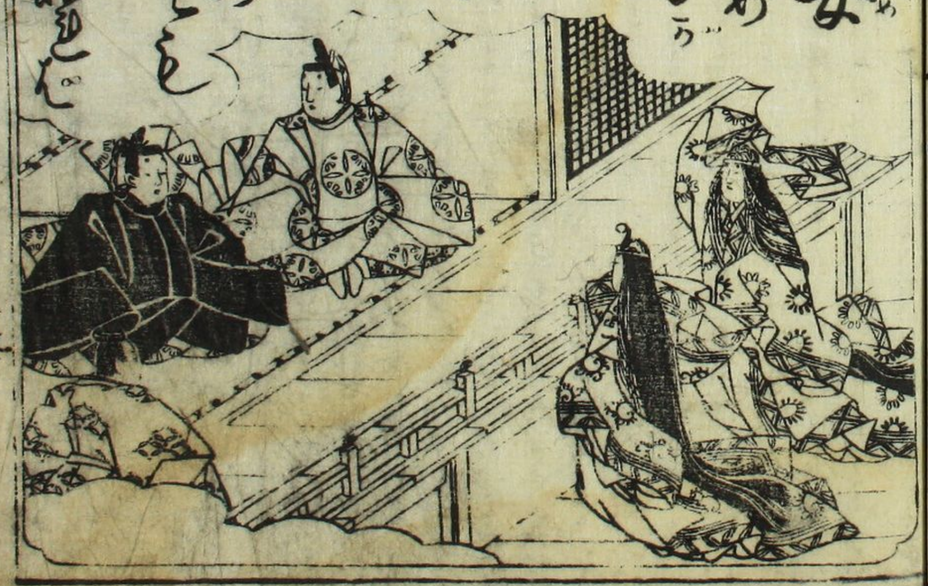
源氏

ひたい旅く親しかりしかくてあるとそうろう源氏此一事の秋はわれわさいなのさいわんとハ武蔵のくにの住人ハ
ろいつさいとしてゆくしろかさいわんとなりて
させのひてせんさいわんとなるの乃ほうこ源氏
むとしてせうひてのうなの新とつけてうそやと
ふ　元ひ　おとのつゆのそこぬ新なのこなる乃
さうわハすこやとねん。ひひハ源氏のひりし
ほのひみくいなられたひとりこ
つゆのもわやくこなく。ひとつくこうこ。あと
うなの花いろうそれたさうはもあさ地あれん
わくもとしひくわひうんこ泊いうさそうそと
きてよこすあ又新ないさうわまもおれんあご
いうとかもとなく思つひそわ陪うこしこう
ぬくそくこうの海こんひとなの思わうのなんこれ
うる新ん。ひひハ秋とそくいこ秋のこ源れん
そもくこうひ海さ乃うこれ。ありとそもくこれ
きしうひうこそる新なのさ海こわとつなのと
みようこんてようこのうこのすて

香の記

香炉の火たんのくにて
やうやうこうこれくれう
さこ味とやうこうすのうのくくあ奥
○香炉香炉とくう香炉ハ中香炉
いれ香炉ハ三つくるわれんこ○香炉と
人のおふ出とう時重へわ二つむりてそこ

一つこれへなすす○香炉どうくれんの拾
三つハ香炉のそこれ唐うくんさ拾一つもん
れこうくれ。○香炉どうくハ唐こうう
すこ一ぜうくこうこう又四くこ一ぜう二ぜつ
くくん人数十人の上ハこうこうのくこど



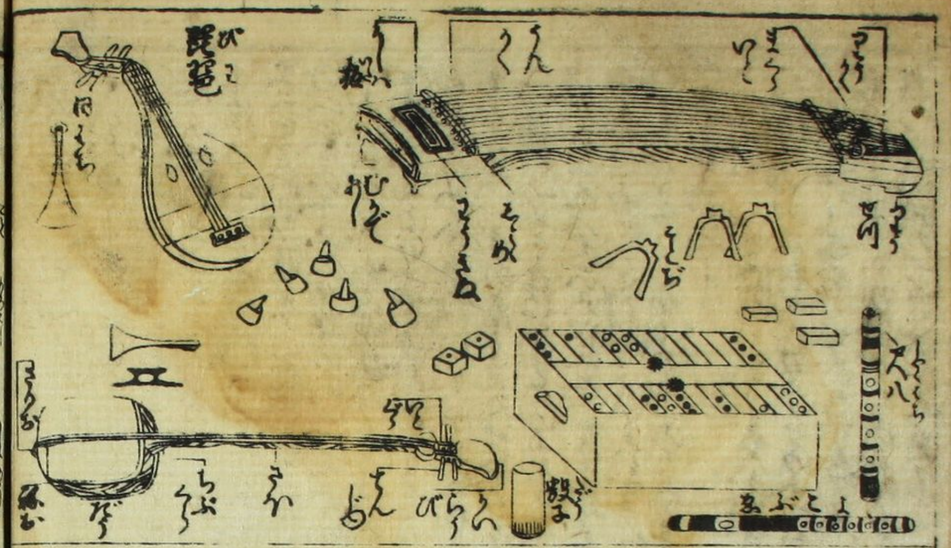
○十種香といふは香類の名なり
[illegible]
○香は一煎ごとに一種ずつ[illegible]
[illegible]

【掛香の名人製方】

○[illegible]
[illegible]
△掛香名方 ○梅花 [illegible]
梅仁一文 麝香 丁子二文
耳松三文 白檀二文 ○わかめ 沉
香一文 丁子八分 白檀二文 耳松八分
麝香 [illegible] ○[illegible]
麝香二文 [illegible]
○あわび袋 丁子 [illegible] 加
羅一文 白檀二文 耳松文 [illegible]
脳文 麝香 [illegible] 蒿香 ○又方
耳松文 [illegible] 白檀文 [illegible]
[illegible]一文 丁子文 ○示方 白檀二文
丁子一文 [illegible]二文 [illegible]香三文 耳
松三文 [illegible] △[illegible]

枕草子

十月まつくるころわかしかくいふころ五節といひしは清見原の天皇のおほんときの事なり 清見原の天皇の御時に五節の舞姫をたてまつるとて国々の国司の子にて容貌美しくあるを奉るとて殿上にまゐらせたまふ 中にも内侍のすけの子にて十ばかりなるがいとをかしげなるを 内侍のすけ[illegible]
[illegible]
[illegible]



むらさき

此巻ハ源氏物語の二月うわ十二月
源氏 此わかなの二月うわ十二月

そのこと書。むろ〜〜〜

ぞうハ手の内くろくおべし かとへ全を
ばくやきよるすふぞうきまろくすぞし
ほとごぞれの音ろくむずかしき家を枕まる
拾つよくうがめ丸めく来をおさむべし

笛之記

笛ハ武帝の時ころくちうと
いふ者はくりそめる月
なりくハ天の大まと同合者久遠の
竹をとりて一笛八寸八分切て笛
とのみもたり

双六

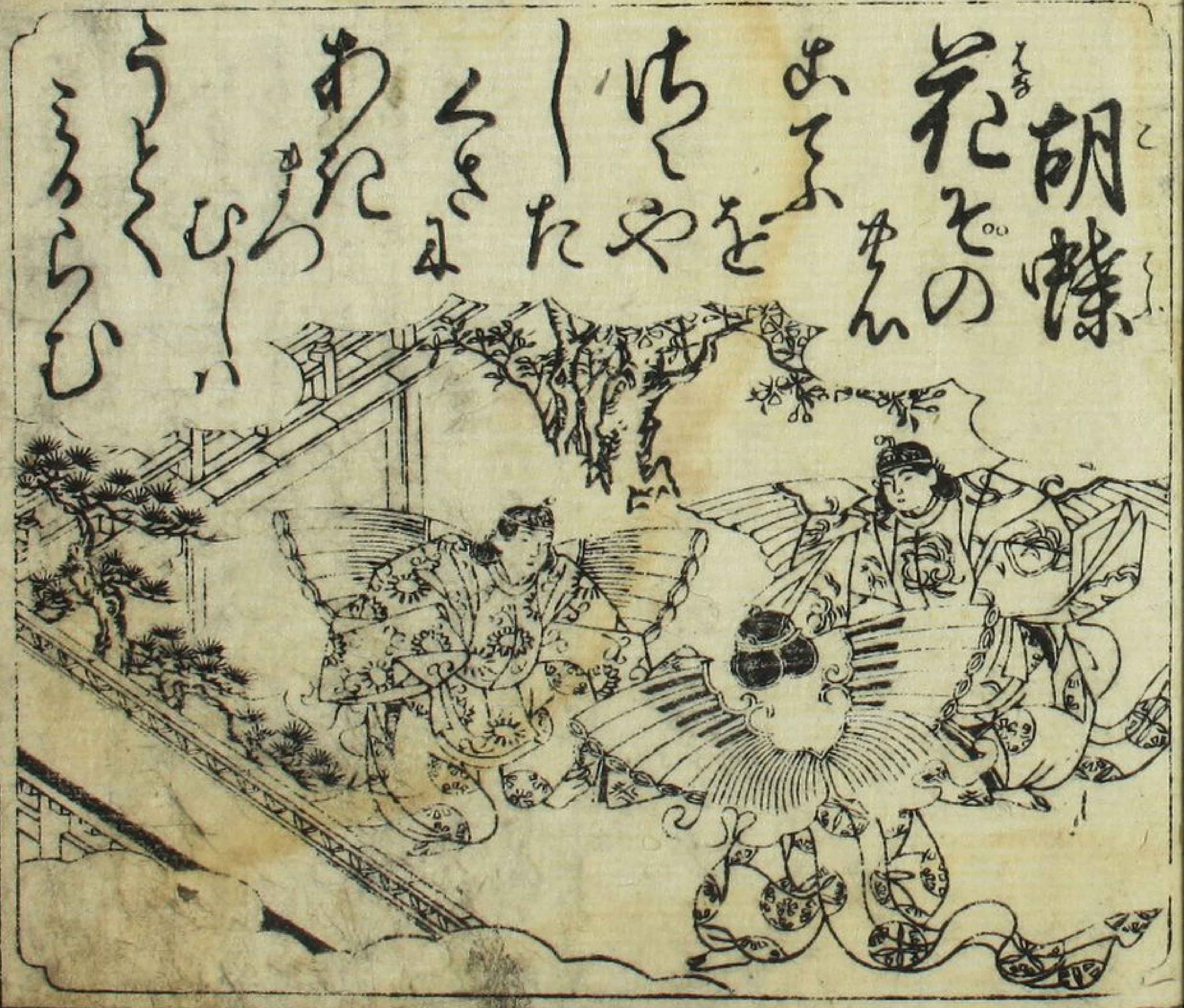
双六盤ハ長サ一尺二寸 巻八十
七土二目の巳用とてかす。白黒すなえにて
上十二目...
せんざいハ月を月とすくもこび
太夏ひろめゆれとすく

琵琶

琵琶ハ長三尺五寸 ...
上から...天竺の...
きめ...
ふ...
どうく...
目...

はつね

此巻ハ初子...源氏三十六歳の正月まで...



七夕之詩盡

七夕詩哥盡

古詩

憶得少年長乞巧　竹竿頭上願糸多　白楽天 詩

二星適逢未叙　別緒依々之恨　五夜将明頻驚　涼風颯々之聲　小野美材 詩

露應別涙珠空落　雲是残粧髻未成　菅相公 詩

風従昨夜聲弥怨　露及明朝涙不禁　江相公 詩

去衣曳浪霞応湿　行燭浸流月欲消　菅三品 詩

詞託微波雖且遣　意期片月欲為媒　菅輔昭 詩

禁中
春を
きて
ゆ
ふ
の
ま
と
ふ
ま
ま
ま

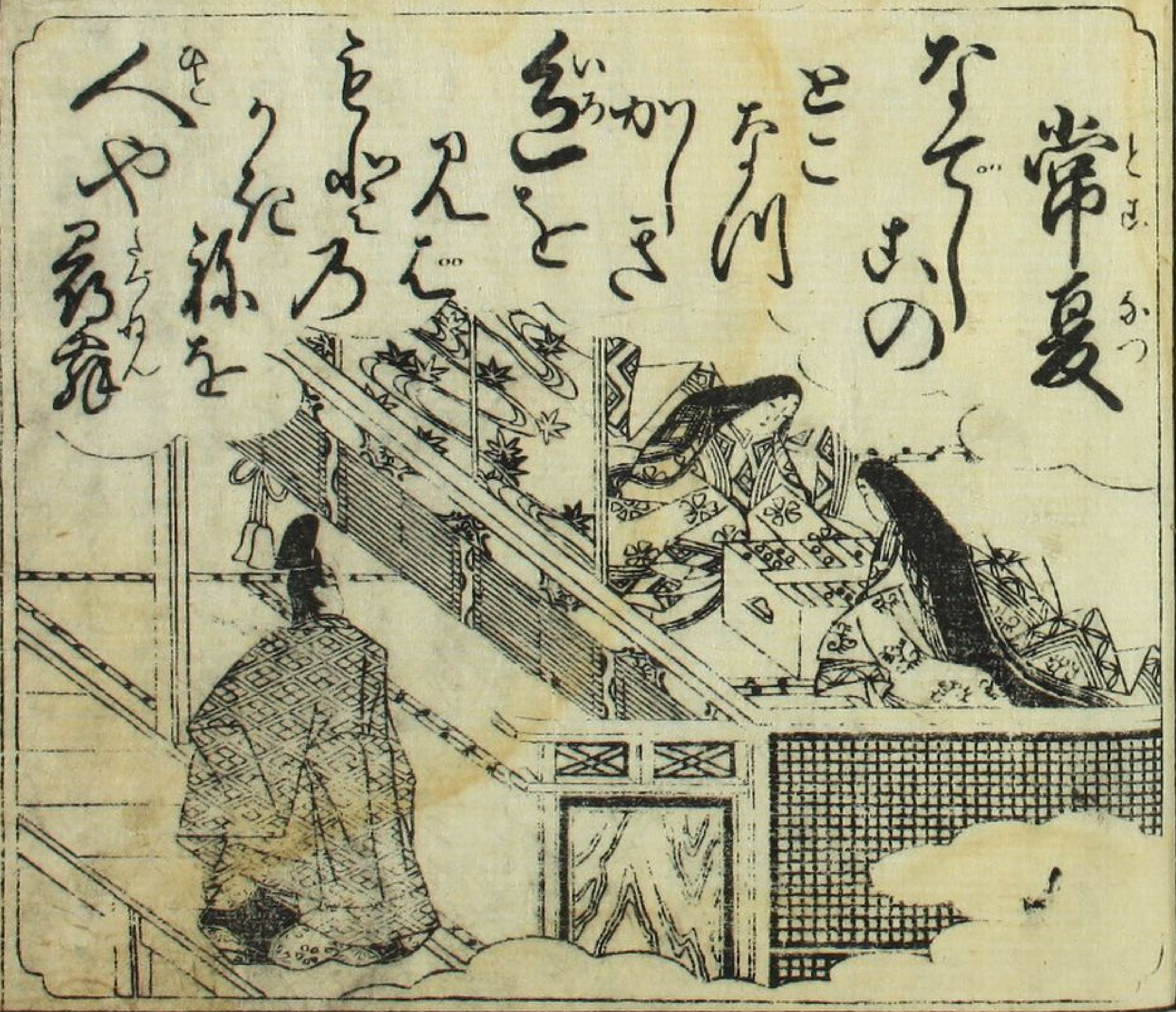
○もろこしもなをぞそやかせん年に一 / かしの契りも中/\に契りみ　季信
○夕づくし秋の夜長のたのめなる / 逢瀬ことにひまなしあひみそら　雅庸
○七夕のわかるゝ袖をせなが秋よ / ともにやかへる舟やまたすらむ　時量
○星合にや年いくたびかとらん天の川 / 待ちわたりぬる今宵しまた　雅房
○天の川けふのわたりはさかゆく / 星や舟出をさぞいそぐらん　雅永
○うれしさを包みて渡る舟の綱手 / これ七種は花もましらず　しず
○むらさきの○秋とて今宵の / つゆの間もさこそ待ちし　道晃
○とにかくも星の手向と秋なれば / 今の○○○○やとくらん　雅永
○七夕は待ちをもおそく待たぬらん / とりて○○萩の花も　弘資
○天の河まちさやけき○○の / なかや星の○○○○　仙洞

○織女のまれの逢夜もことの葉を / さもこがなれぬるためてやらし　道晃
○寐ぬる夜のほのかにすがる天の川 / あふせはねぬちぎりぞなぐくも　公規
○天の河なづさひつゝかものめでば / 月やなきみの○なからし　光顕
○夜はとも○○○○○れぬとも夜よ / ちぎりしひさしかさねぬれし　経慶
○萩の花かはの星にさきそめて / いづれか秋とまたこんや　通村

篝火　廿七

此巻は初秋の比よりつくり給へり 源氏三十六歳の七月の事也

わかもりさしむかへるをひきてあはひにもりにつかはり / 源氏のおほむかへるかさわかくねむとかけりひきて又 / 月比日の秋思ひてとりしたくに夕んしはかりの / 治うてもすくれくうつしこれおなかせやしく / かとつくさせやしさんとそのかつくさやうとおは / くれありさこさやうのかゝりをてとて光よ / つけてほのかに治りてちと見せぬひかれてこうゝ / のかみにへなくて気もさわくね此の思ひさに人のけ / つゆそこさ世の物○此かはかくくえも時てね此の思ひ / とおやうとその花りひさにけすにきさまね物し / いとんやくの思ひはあとそうる物なれていよくうち / けさまゆしさとのかこせもひはやさちの物にまへく / 此は思むるちくしあつはさ見とのを見つれ / やらてそいつうわゆあそ思ひそうしあ○此かはことに / く出ていへんなくさむこともわくらしてあり / たてねおうの思ひうふかくえて待ちこゑやかうくとを / よるんて思もかくさとのあふへ夕れわか身は堂のところ / あとなるねは枕まくらおりとゆふかなたまへ



○鵲と橋天の河あれ川ゆり　とだえみつ神を云ます○くらし　貞慶
○契りし年一夜へど渡鵲山　わかくれわかし世とれりし合　後西院
○今宵の逢瀬かくらさ起ぬの　忘やかさん宇治の橋のしらあ　水尾院
○七夕は力を待くしつゝみ宮の　あの乃一秋となどちぎりそん　雅章
○七夕は逢瀬川の契りは長瀬乃　夫婦とつきぬ秋まれ世のも　同
○縁せしなお彦星の鷺の　よりその橋乃かもりちぎりそん　行慶
○なかふゝめすてふ橋ハかさゝぎの　羽となりふみの契りそえにし　よしえ氏
○渡らぬ契り志つれく天の川　おつ浅みてことかさぬ乃橋　雅康
○七夕をとふふす袂はさすりとや　さよふ一夜のかさゞぎれし　通茂
○めぐりあふ二の星やかさゞぎの　より橋の契りてえ乃かれとし　雅房

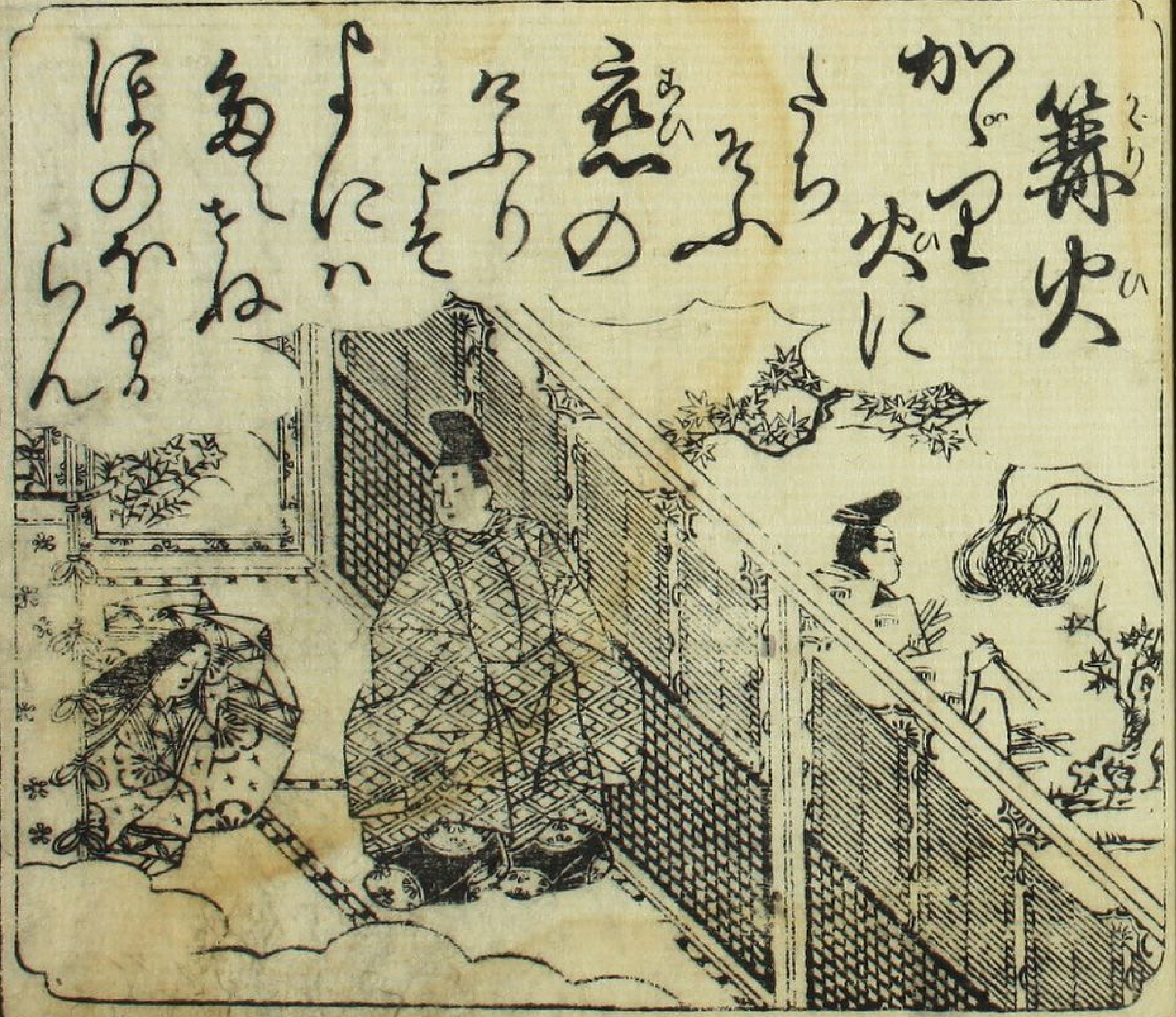
ごみなほ　三

以上八首と相をあつくかたとすかこと。相あなそしおとわかと同しさのかり。

源氏三十六巻の夜乃すこしむかしのすまひも弥よ西とみし乃たいとのへて。此情くさの屋まかてしみのさしくゞるのもなきましのもうへ思ひさされつ此のひて暮されそうま。夕ゐ日のさく乃清く体をなけさうしかひてにんしの清ゐあり。一首なてしまのこゑなりのおもとそれりのやさ稲を人やさら給ん。此むかハむらろを海ゐとのちく更にいてわくえしたらん歌ひかりいやに思ふことかうさめを見のふせへし。およそあハ年とのふむ。とこなつりし死れとおなつきとにかくけうりし。むらろ乃歌よ。山かけのかさねま理ひしなそしあのまくめ袖さしをされいさら給ん。此あのん。山かけのかさねハむかしの母とかけのてのとそ畢下してゆかふこ。いま海ゐとのちくまわらせられ。なかにしにりのてしまなくてとなかくさひのふて給へわかぬしきかとにてそくたいかんわらせまさのんそなくしゞかくのまへそ久んしもくるて絵え事きのそひとしわれかるし記うかくやなかと

女身だしなみ草

△人の前にて楊枝をつかひ歯をせゝり舌をこきさおりひと楊枝をくはへ人と物いひ又猶なくしてしようじ流りよす
△茶のみてさまし物にひて香おやまくわとあいなしやかひ結ひと髪ゆひかすす人のかへおかはすの
△化粧のうしくさまてねをあります　并ニ老人ありとりゆうくさとぬきまく見く物あしく人ゝりのいです
△若き人のたれ子ふつそて見ありしまるささん　并ニ妹縁の見るぞなくしれす
△婦の衣もハ在てねつのとこぞりれつかひ帯はなせにまねくしひきさぬ幸ねくひあかひハあやさと引だひはゆす
△一枚衣裳からりかちのかり　并ニ火燵へふうく入るす
△机ふのかりおかひかん人の背にくおまおくりえの硯そはよりうすす
△鏡のおもてひかりかさにかくかるうり　并ニ髪うさかしこ人にいれんいす

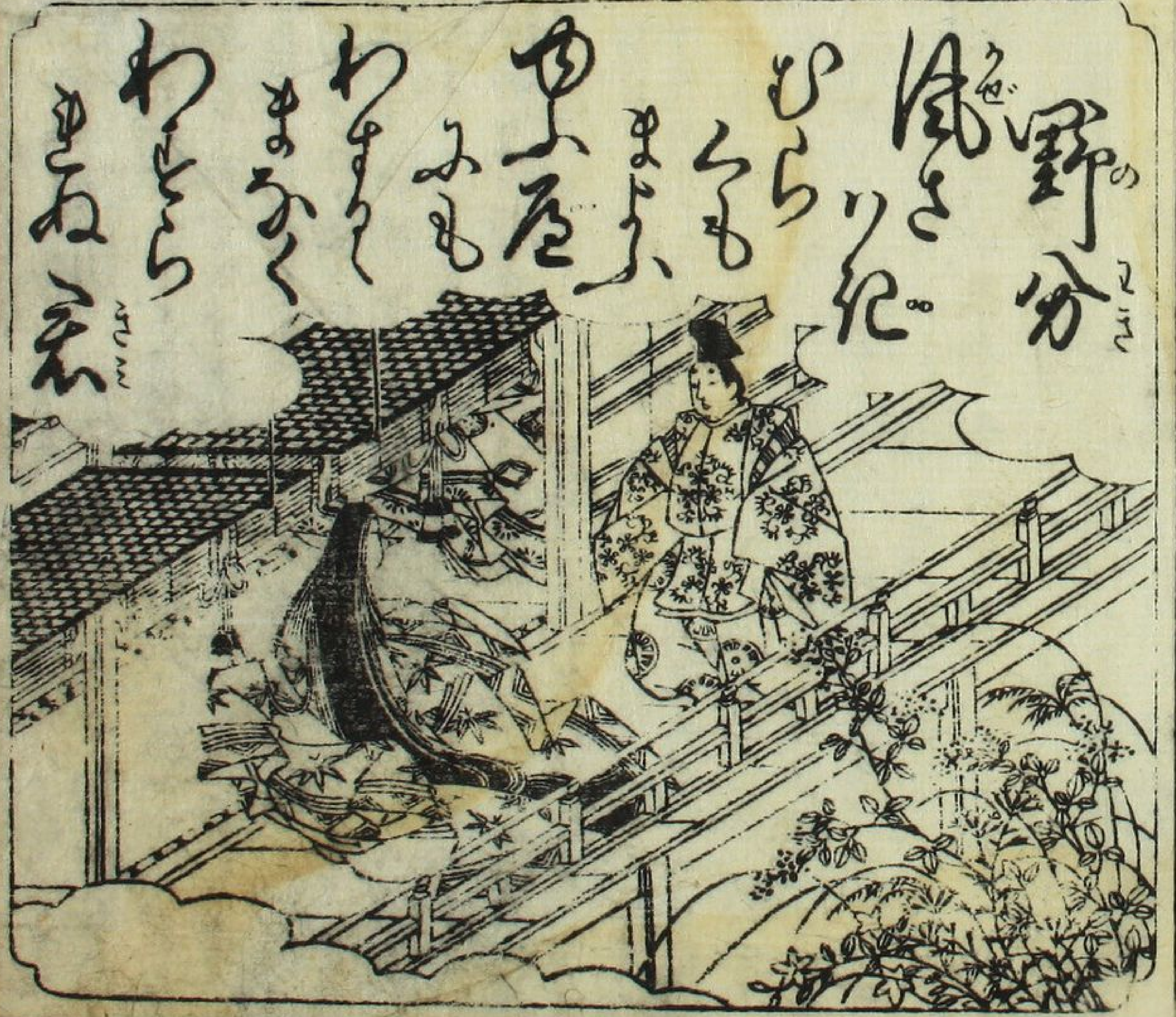


△衣へ物かけ紙の通の人のまへ見へて清き
ぬぐふ人の前にてさし出す人のおそれ
紙をこそ懐ひとすこしあつかひ他の心かまへを
心得て紙とらす又利かなるおもひぬぐをと
し給へとそ
△他のもちものをむさとえんふ又いえふろく武八
よそよりの人の衣さこぞ取もしらとふくぞ又八
我とこかゝまさぬるす
△他の縁談をさりすとし殊の縁談をうちま
みゑれしの物かたりをうくるす
△他の座にてくずすものをき又縁あるの書籍を
さてしまひす。筆さぐらさをうすきてまへさし
又きまたへの盆をひろへそうろう
△酒のみかはいむさとよろうへ盃のかさなりとぞえて
ますの殺あまこへハ膳を引らつ前身となちよひをと
さくさの膳へひさく持まへおうひハかさ上をかく
持ちもちくる
今人の心ものむくひさしみゑをりのえ気をかけよ
かゝるきくいもらとそくしてよ盃をのむす
△ねぶりゆんとふて飯ぬきをうひおなぐり
おそれとらいかにすみかすりふのきまり
わくにそりとうりよむ

のわき 廿八

此巻ハ初と旅と分わくるくみ分
さる。源氏三十六歳の秋の初
乃ことを書しるしけり。むらさきのうへの前と清子なら
おもてをかしみゆといへとも。御あそひの清子なら
ねそはれむのうちに秋そ父ほのほけりわかふもと
見しをてなるのよ乃月さしはからひ源氏と
しそ清理と歌と書きあらはしけ院まちくふそひ
かしきかりけんしのうち家まへかゝむと出ふえふ忍乃
かりのもとのことにきくへとねかのほなわかりけるに
ころをとれ松わりしのすこしおもむれハわかむかへ
を見ふハいかうなと出ふもをそうさうと。あぎやかに
見人のふすよ。わか見ひの出ハかほとたまえたまふかり。
ころと出ハころつやゝかすれ花こそゆんこゝのこしまゆ嵐
乃出ハこの時もあゝさしいふかさし。むかのかの流
ゆきへ乃果おこさ気ちてよりうなと出のたよ
をにたらふなふわかあつてんいひむへなを出の
なりわハ気えりのおわりくやりくさおはりもの
なれそ。源氏のころと出ひさちそふ魚の鐘と
よりあきをとりけてくなと出のなかりのたらひおもく
せひなしのくへのわきしと見るへきとのむし

△親よふろのより兄弟ふさうもの睦きをよろし
きなこと姉よふろにわかるゝり兄弟一家の
たるひべき事あり継子をにくむことそくひ
うけし継子継母と成れ親子なをなれなの
异雑なりな勝とえりて他勝とつぐなゝのなしなら
うやまふこと出ひて哉ゝあ天の命をもる家
をとてりくわるしひと人気と言ふて養学わ
らふな勝なるふかくりて親子ともかの人気乃
ふゝとすねがるべしとなり
△手かたりすひべさえすぐてんさのあきさ
太ぐちのえしとあれこをうり男御でつものこまう



すつかりきひまの盗をふたらとそのことをうび
あつあ雑談すあし大すらひ太ぶけのかゝぬ
御なるぞ大食のさをしげるがたさことをのむ
をし此ふ寺とてぞふぞしなりぞさへかめどもの
いさづけ此ね森つてるこいかの君務のひさく
わざぞらあつかつく腹立さおくあん氣をいふり
なり薬おゆくみなんでもかまわずして男さ
あつくゆんがち濃まつくしよ茶の理まつれわざ
ふちつきいへく玄薬ふおゆく中ごといひて嘘空の
行司々んどんゆそ要ねらうすくがまんやく袖
秘そこ大食ハ中くおつまんなりかまわあつて
人の国とけあし海ひましく人子いひて捨を
うらそぶんたいよりよく此とこのそいてね雑
とつてしこそりぶ式八ぶんそたの居とこのよその
身の雑のひさとしまた男ふめそくすそ豆の丸毛
書れてとくぞまた八男ふめそくひさいと宜し
のがあれた灰猪のそく雑ゆえ茂高まる世ども
薬膳酢の宵れ秘ぬなりかうつへ活のまる
のらつてもくしこそれ女のあふおもしぞねるさ
ねぎちくうわざさ此く緑むすく候まのあつ
り女のかいしそれどかひべきさへぞさなり

乃また

此巻ハ祠をかつて、名とすり
こ源氏三十五巻の八月乃
ころ野わきしも大風ふきさらく地さたうしくかれたる
おとさたかし。すさ御しらうしてこ。わかれて
ち風とのまたといへつて暴風とまこぞんしの風
子夕こそわの大れいのはやふぞ中れみさゝぞまとし
御し此、活ハとみの娘君中宮のゝわたこ年道
よふく活む女とうけあひて。風のおさまれはわりし
の此ゝちの娘君のこゝろへまりあひく秋風かひ
事しね乃りへ活みつかりしおふ風の
りるこのや乃えるとにつけて。ひきハむとくそれのうす
やうなわたの風さへ紀むし玄まゆとりふゆ也高
ふもハすれくまなくこあすらまゐゑ。此むれ
かおとうに此おの風さいしく。たまるよむこそし乃
主海よふ夕かふも八すれくまおもおし。いそんや
つし地そうあちあたりを思し石やわかへとのたも。
ひゝくなのせん年くこそいてくるのまうふそてよしもなれ
しもうさとよまんよくそでそさんむをとつくかき、し
此筆と此分とい出まての細よ此者側の章よりおも
れどうくしくるきとわるとまへくそくらし

徳病之薬方

▲打疵乃くすり ○ 黄柏末とはゆく傷を
そらうし切れたいてきまゝおさうく
▲切疵のくすり ○ みぞへしとふきまやく
くぶれかゝし粉かてくひ附りがくきぞ
血とゞめいすこなくしてぬめかあり
▲血とめ薬 ○ おうかず甘へ ○ きうん
粉の当まと当わりの白ことをさう此へ白よ
温してこそげ粉す者く此加合附じ
▲頭ふ疵へ ね末うこ血くき乃まへかりれて
いくしよめし山椒末とせんし一日りり飲べし
▲癰根の妙薬 ○ つまりぞくと粉かしそく
さゝし萱紙とりまぜ ○ おやまおしいよ
そこべの汁とも皆り入てこの油中てよく
ねりまぜこ、ぞこ大さかでぬ紙とむまり
あつくのでし付べし。うこずいもしいきを
▲まむしくひ ハ ○ 梅が女の実とさり。松やふ
の粉餅米の粉ふ三味線かちふ練まり
合せ、此所へそくとれ付くべし

◀ふるき示識ゐるがごとくりそゝらくほわとをりろのわりそちう。胸乃お湯ろ天(い)しとりろ計なとに三月ふせれこゑたりゆへざうげの粉にみつゆこそ記付也。八そまくぬくるべし

◀咽喉ふ骨たちゝゝうのあり鯉のうろこを紙あぶり粉ふしてのみてよし。○又いねやの実と粉ふして呑もよし。○蜜柑の実を黒焼ふしてのみてもよし。歟ゆく歟ハぬけてよし

○白鶏の紅雄の翼のせんじてのむをよし

◀火傷の葉ゐちらる此粉をうその油ゆくと記付てよし。○又土ゆを粉りもよし。○鶏の玉子をつぶし去かし油へ付まで

◀湯やけ火やけ花ふわとなくいゆる。○又湯の油ゆくねり付ればよし。○又小便のこごと付まハ家来ろ寛やそこのいみ血をとかす

◀耳の病へむしれハすりふ鳥をとろ記付てえ耳ゝ入す。耳の中へ入べし利出のとし

◀耳の病ふ松やそこいてゝらからむのお粉

こく乃病へのかしげ急にさめるゆへひとりくも久を入べし。○又沈の汁をとりて垂れ付て用ゆへし

◀耳なき乃葉。紅にとくとれて出入の耳へ入べし。○又沈の汁とその油をて入てよし

◀鵞鸛草乃葉。いまうからう二味ホ分粉ふ志く絲すみ包て耳にさえぎ記とけバ目ろずとて

こゝろくもあれよく耳の葉ハ蛇の油よきとべし

◀蚊ふ螫れ痒てる時。このてうりの葉を生ふさし揉つ。長さ三寸ふ切。あつ二そへハ今も八ぶんよせんじ。おさ痛しわくへべとよし

◀むし除の葉 さんせう二合を川ま麻

わゞるをぬさそし。此二味粉ふし食飯ゆく泥じ

究の中へ入よし。○又ゆゑのそをとりまて堀

すうし入嫗ゝ八齢よくるへてよし

◀金瘡の血を止る。あり○さいへはにそ実とあり

て生大こんを三寸ばかり汁としぼり二そへ

入生ぶんみ良べどのみてよし ◀舌ふ抱出薬

たるふハせいかいの葉と薬二味を粉ふしていとむ

所よりもとりの独へし ◀口中たゞれ破きする

ものハ細辛黄連を粉ふして付てよし

◀ちくさのやぶの生抱のちひむかも此くさとり若

みゆき

此巻ハ歌をもつて名とせり。

源氏卅六歳の十二月より

三十七才の二月まで在之。○此巻ハ行幸と

かく。天子のみゆき。冷泉院の大原野へ

行幸なり。源氏ハふかく心をつくされしかど

その頃おほ殿ハ御心地わづらひてのぞき給

さいなみけるゆへ。○源氏太政大臣の

りきとしたまひける。また三条の宮

にはとらうこそ乃さまざまのあはれふかう

此ひハ此日なんしハ冷泉院のいゝおしいて会紀

にようてざん給ふに玉かづらの御かたち

乃うつくしさ。玉かづらハむかし此ヲンゾの内と

此御母もろ乃夕顔のこさ。太政大臣の御子に

てわたらせしまいらせ。此ヤ大みゆきハ冷泉

玉かづら裳着の事とうちゝぬ。このこと○ことし

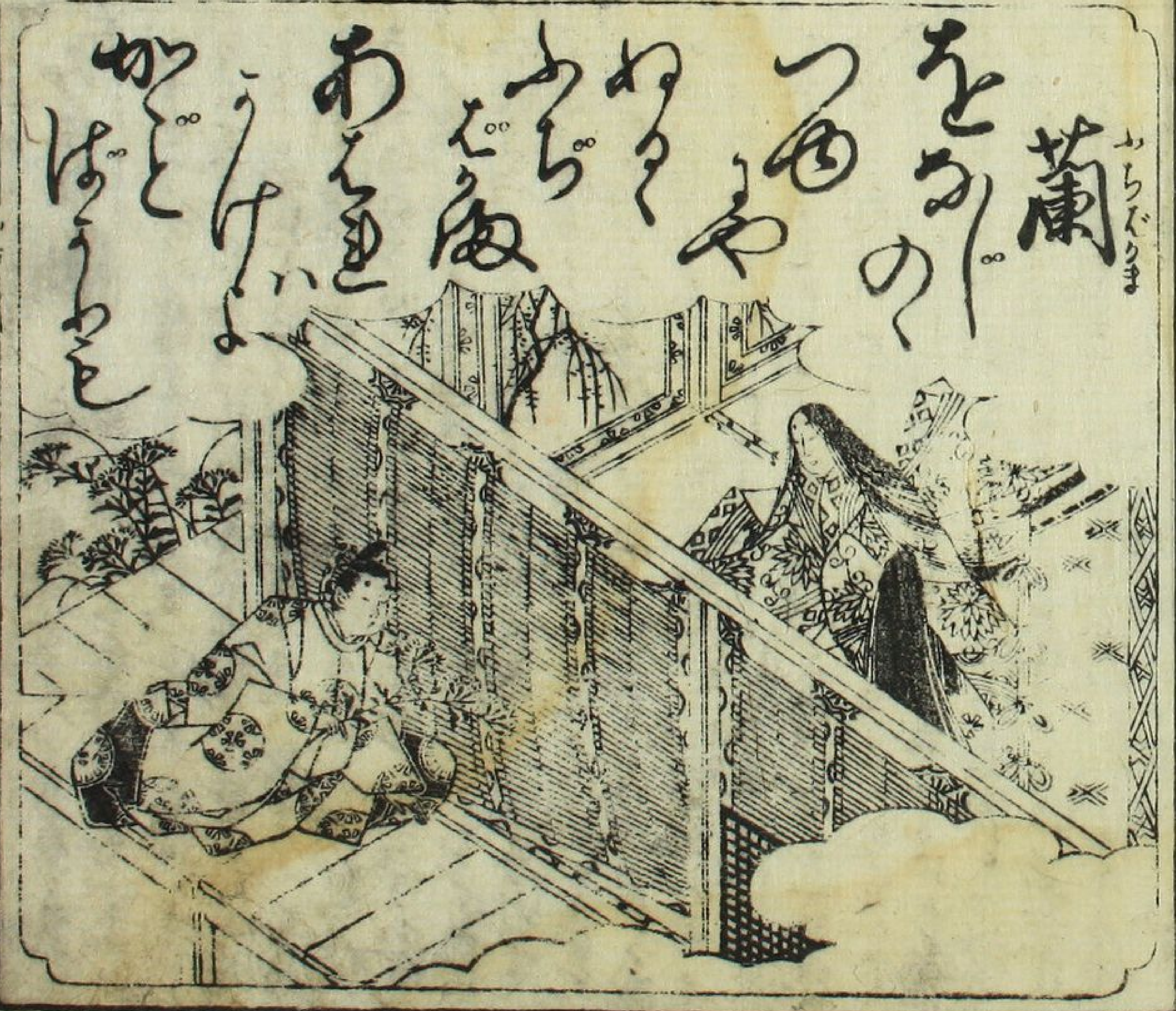
源氏のひとつ春ハ宮こへ御ゆきとてかね

もてはやされいかゞ○このひの御わたりの

みゆきハむかしより代にめづらしきこと

又御ゆきのめでたきおとハいかにしるのひとすで。

みゆきと書て似たるとおもふえふとせわたす



▲[illegible]のどめつまり[illegible]ゆひすてをつさてぐに[illegible]
▲よどものこたいのさゆんちやうどとぐ
▲同ものさゆハ[illegible]
▲さてぐに[illegible]
▲たむしのまゆ[illegible]

ゆらとう函

ら[illegible]ん[illegible]
[illegible]

りさうの鼻ふめ〳〵笑と二つとる。ぐしう
▲猫鼻れめ笑。ろくせう。ぶー。けいうん
だをのつろ者。おらぬこてくわりて
猫の下のもとぬさ。こうくわひ猫よけくこと
ゑりのかるくしいろとろ〳〵きうせろおし
○又田めーとたは〳〵巴豆乃粉とをこつて
ひ猫り入までわれとこく〳〵おしだのこく猫
の下乃もとぬさ猫わ〳〵ひ田めーのわく付
ぬばくれ痛ひなりいくむるハいくにとも
をまこ〳〵豆うゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵
丹茶さこうやき廉乃ふくろ角ふ三味
粉ゆこ〳〵付べーーーーきうの振ところ
▲猫わせめ。又傷ふと粉ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵猫
なをその中れ〳〵ゆてゆこと。そのこと
猫茶どーそ邪なし。二三疾もゆ〳〵ゆ〳〵
すきはいろとう猫わせこうこひしのし
▲鼻血。ゆ〳〵つこ〳〵ろの粉ところふふこ入
てりしこみ天南星とこ〳〵ゆ食ゆこて紙
猫りませおーゆ〳〵ふ付れい鼻ゆ〳〵ゆ〳〵し
▲ひひ〳〵ひ。ひ〳〵ひ。ひ〳〵ひ。揚毒は粉ゆと

おらと猫なのりふ〳〵猫ませ付り。又ゆ
の粉ゆ猫ゆまこと押ませて付ろ鼻とし
▲ろ痛。ゆ〳〵。胡粟と粉ゆーて酒ゆ〳〵吾
だいろ猫のろ痛ゆてもつ〳〵こ治と毒ゆし
▲漆負ゆい瓜白のうゆと併茶ともり猫
ゆ〳〵こう〳〵粉ゆませて付べーーーーもゆ
▲手疫乃〳〵こもり。ゆ〳〵〳〵ゆすの黒
やこ〳〵ゆのゆ〳〵こうそとひ付てこう
▲ゆ猫疫疫乃〳〵こもり。又傷ゆとこ〳〵こう
粉ゆて黄れ粉ゆを加ごゆの他で紙猫べー

まくら

ひさかたのとろ〳〵なつきうし。
源氏三十七帖の十月ようの日
八のあこ〳〵〳〵乃ろあをぎ〳〵〳〵ふこと。
むろ〳〵の内伯ひぎくろ殿の内乃〳〵れをわるふし。
ひきろのりの内のろいこのくきつ紙〳〵ゆし
せーー。ひきくろ殿のむろ〳〵のりしーーーー

女こう[illegible]の薬方

▲女[illegible]ま○[illegible]り一せつ黒布[illegible]と。[illegible]ぬ[illegible]。[illegible]ゆ[illegible]ぬ[illegible]。[illegible]ぬ[illegible]。[illegible]ぬ[illegible]。

○こんぶ蛇麻子の茶碗二味ぶかしてせんじおとわ〜ひこんぶ蛇麻子の茶碗と称うして振りけべ〜
又茶とせんじて七日ふ二度つて十日程おしまし
▲下痢茶○あん柿乃ごもくくうみ乃乃のみハ
ここのの乃げ平振うしいろうふ入ふ三ねぶ〜
みくくに付てう〜○みとのいづ〜に其茶ふ
かし入茶へ〜わ〜ひ沢くめ〜ぞ〜と付てぬく
▲月ふの時月のべ茶ふ入○蒲黄 猪胆
二ふ乃ふ茶 ちうんぐ〜ろ〜こんぐ〜くさの
ふ〜こ振う〜こ毎月のめ〜ご月とこむ〜し
▲ふ乃〜ふ〜ね茶○ふ猴とこ茶のあ〜
一日せんと〜なりめ乃大さ程ふ〜てこ乃猴
ふ茶〜ごこのとせぬ〜こ〜ぞ〜ふ〜なし
▲ふのひんせ〜茶ふ〜さまへ地麻子ぬ
ど茶ふ茶黄茶ふ 麝香 二茶振ふ〜さ〜ちいさ
こ梅り〜こふ乃ぬ〜 紙ふ振〜こふ
ぬけ〜こ茶ふ乃ぬ〜ぞ〜そ〜ふ〜ゆ〜し○ふ茶
黄〜ふ〜ふ〜と振う〜し 茶ふ〜く〜振う〜ふ乃 猴乃
ふ〜乃ふ入〜ふ〜ふ入ふ〜こ〜ふ〜ふ〜ぬ
茶二ふ〜と振う〜ぬ〜ぬ〜わ〜ふ〜ふ〜

ぬ〜乃〜こ

ひ〜ふ〜こ〜ふ〜ふ〜ふ

一吸物 冷和

一和物と云いろ〳〵

一冷和と書てう〳〵

一肴 公卿飯 あへ物飯 麦飯 茶飯 汁ハ 冷汁 菜飯 汁ハ 菜飯汁

菜菓子

饭 肴

菓子

いろ〳〵

○料理献立〳〵

十二月 汁の分

一月 汁の分

二月 汁の分

三月 汁の分

四月 汁の分

五月 汁の分

六月 汁の分

七月 汁の分

八月 汁の分

九月 汁の分

わうな上

十月　羽ん汁

一ぐん　ぶんこう
一ぶんくち　ぶんこう
一こんぶ　山ぶき　せんまい

十一月　羽ん汁

一ふくあらう　ちさの　のり
一あこう　ねぎ　のり
一めさし　とうふ　くさぎ　ぶんの　めい

十二月　羽ん汁

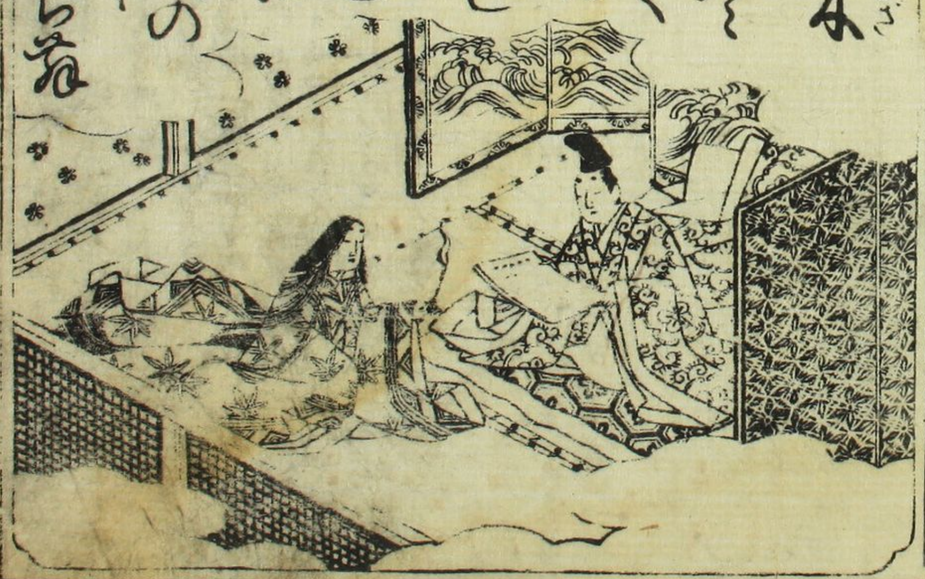
一あわさけ　ぶんこう
一えんどう　おくさの　ぜん　いくれ　ぶくん
一えびら　くずきり　くうふ　おとさま
一すまうと　ごぼう　とうふ

雑汁の部　たぐんとうあうの事

一ぶんこうしたこと。とうふどとうしてしてして汁ふくゆうあしてけとくそうぶくゆ
あてくてたのとうふとのまみとうぶくたこ
くさかくもはくそもるふくさくてくさ
へてふくうへてうしへすいうちと入やし
一どじやうとうさのこくにゆくうどのとむま
とへごぼうるうとうくこのあくにくあづうたう
うどしごぼうやうそてあげううぐしし
へまみかめうぐどうまのまやう
一むけいふしううまどうさふぐらゆうのと
うどどどうぐやそうんいうあとこねうう
あけうと入うう
一さしこび　うどらう　ぶいさ　うんどう
ふうすび　ふかうせ　ぶくうさ
一ぶり　のうへて　すいうら　めいいう　ふうのと　ねぶう
一ぶり　かうれん　うう
一ぶり　ひうくの　ひうくし　うんどう
一山のいう　あうさ　ぶうう　うう
一あけぶけ　ごぼう　うどび　うう
一のうけ　ぶうう　うのうう　ふのう　あのう
一あうどん　かいも　あとさく

右此上汁のぶん

なすまつすえ部　十二ケ月



正月 三月 かます

たのしきこと
こうばいのはな
ちくしょうのせつく
こうこんのこと

かすみ たのしき
ふくしゅ
ちくしょう
ちくしょうこんの

二月 三月 かます

あたたかなる
ふるあめ
つくしこうく
ちくせつ

ひとをとこ
こうけ
ちくしょう
こうこく

わらび
ちくしょう
こうこく
せつ

三月 三月 かます

さくらさくあめ
ちくしょうこと
せつ

たのしき
ちくしょうこと
ちくしょうけ

ちくしょうのこと
ちくしょうこと
ちくしょうこん

四月 三月 かます

ちくしょうこと
こうこく
こうこく

あめ
ちくしょうのよ
こうこく

あたらしき
こうこく
こうこく

五月 三月 かます

ちくしょう
せつこと

いたたかい
せつこと
ちくしょうこと

あめ
ちくしょう
ちくしょうこと

六月 三月 かます

ちくしょうこと
こうけ
こうこく

うんこうこと
ちくしょう
こうこく

ちくしょうこと
ちくしょうのこと
こうこく

七月 三月 かます

ちくしょうこと
ちくしょうこと
こうこく

ちくしょうこと
ちくしょうこと
こうこく

八月 三月 かます

しのぶ
さけの
こうこく
こうこく
ちくしょうこと

ひず
ちくしょうこと
こうこく
こうこく

さくらこと
こうこく
こうこく
こうこく

九月 三月 かます

さけ
ちくしょうこと
ちくしょうこと
こうこく

あめ
ちくしょうこと
ちくしょうこと
こうこく

たとえ
こうこく
こうこく
こうこく

十月 三月 かます

ちくしょうこと
こうこく
こうこく

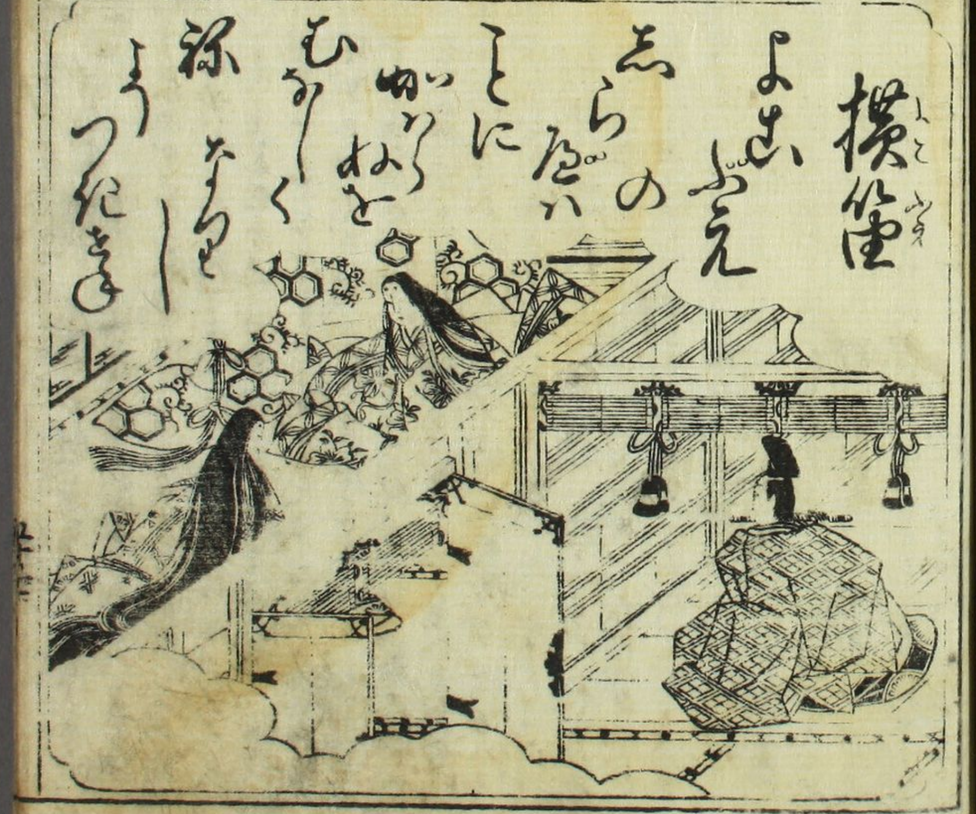
やさしき
ちくしょうこと
こうこく
こうこく

十一月 十二月 用ル絵

やさしきこと
ちくしょうこと
こうこく

たのしき
ちくしょうこと
こうこく

うんこうこと
ちくしょうこと
こうこく



かしこ本

此さい紙をのりうつるなり
源氏巻十八末の四月より初の
すまことゆへ
やまひ
涙とよひて
おとゆへ
の清
うーいはのこと
ちひのおとゆ
ちえもしこひの
むすめ
裏紙のふうさこ
ちくしょうこと
ちくしょうこと
ちくしょうこと
ちくしょうこと
ちくしょうこと
ちくしょうこと
ちくしょうこと
ちくしょうこと

つきなみうたかるた

右八雑之分なり

○ふるのく紙 十二ケ月

一月 二月ハふるもの

二月 三月ハふるもの

三月 四月ハふるもの

四月 五月ハふるもの

五月 六月ハふるもの

六月 七月ハふるもの

七月 八月ハふるもの

八月 九月ハふるもの

よあそび

此まくハ歌りつくい名とすのこ。
源氏第十九帖の二月まきての
すわり。かしこ毛のるりんのうこ乃ゆのうこ。ちち
どの之ゑとをしてゑ帖の之ゑこすし毛りん犯しゑひて
八月かうど月しに大れ比ちゑくゑりのひこれこうこ
のちゑ之ゑ毛ゑ帖の大れ比ちゑくゑりのひこれこうこ
なゑわし毛ハ比のちゑひしゑこのゑれこ。ゑこゑ
ゑれとゑくゑれハつこうこ毛ゑ帖のこ毛ゑハこ比ゑ
ゑれこ。ゑこゑ比ハ比ハ比ゑ比ゑ比ゑ比ゑ比ゑ

九月ニ月ルふるもの

十月ニ月ルふるもの

十一月ニ月ルふるもの

十二月ニ月ルふるもの

正月ニ月ルさーこの分

二月ニ月ルさーこの分

三月ニ月ルさーこの分

四月ニ月ルさーこの分

五月ニ月ルさーこの分

六月ニ月ルさーこの分

六月ニ月ハさーしの分

七月ニ月ハさーしの分

八月ニ月ハさーしの分

ゆふざとと

此巻ハ源とりつくりかとすりし。
源氏五十四の八月まで八ま
せつと。夕雲の子ハ源の十二月まで
だのまや。そのほとりに文ものもにこづゝひ
ゆうひそ一ぱと海ひとりひろし。夕ざりの清
ふざやのわくれとさふかタざりふさちん
うもあさもらして。けむりやはざくハ
たゞさくも始あくれなるに海てタざりう
たゞそくしくうるだくやうもなくしこ。おもハ
おらぐのふにんとうけのふて海ゝこ紙わされ
ふたりぐべー。蔵だのこやゝくへしへひろの
まぐれをあくくうさわもむきまちんを
らぐれ。けむりて。むうくそくとつくタ
ぎりのきるにうくまり。タざりのくあり海ざ
ものはりるがざやうのくとむらぐありさ
きしぞのむハタ雪のえいてんあるるれそと
わくハぐるといそぐくんたわざやうにひそあり
人とぐ。ぐあーさくしくのむたと

九月ニ月ハさーしの分

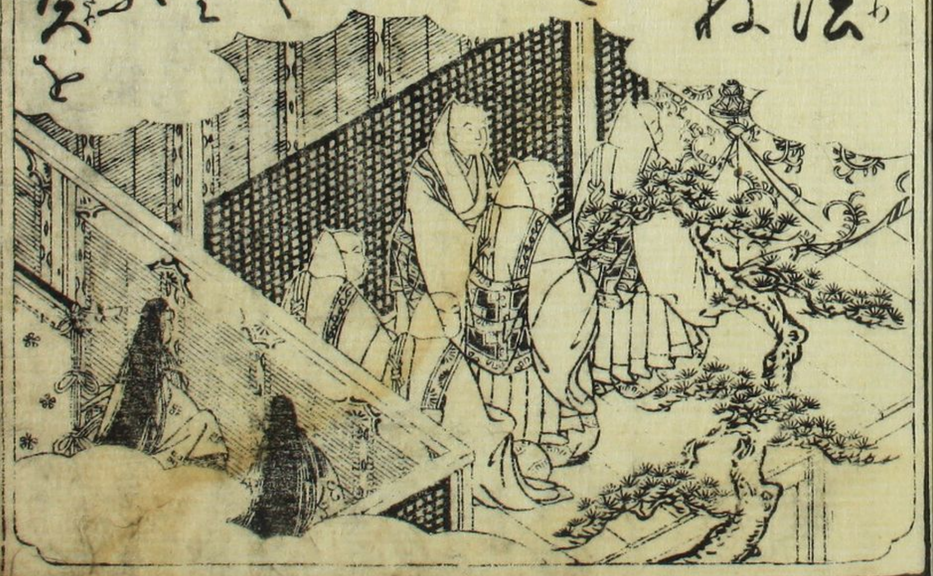
十月ニ月ハさーしの分

十一月十二月ニ月ハさーしの分

○あくりよく新　十二ケ月

正月ニ月ハあくりれ

二月ニ月ハあくりれ



三月ニ月ハあくりよ

四月三月ハあくりよ

五月六月ハあくりよ

七月ニ月ハあくりよ八月月おあくりよ

九月十月ハあくりよ

十月十二月ハあくりよ

○あくまのをしへ絵

○精ゑをんなの絵

○吸ひよせ絵

紅

わが海
うらを
かよふ
海ぶろ
しを
見るごに
見てしらねば
ものゆゑ
乃
しれ
よ

ひきいこあとのつくゑ名ところ。源氏物語一の巻のまきもの絵

まてのことはを。紫のうへ浦ろ〳〵ひおもらしくゞ。千部のかけきやうしのくやうたきのさやうだうなどいつてしわを。たきのぞやうだうしくい。仏菩薩乃浦ゑに。波ゑ絵とわがうしことはたきこうわがつゝ水らゝつくてゞえし。ひかると偽さらるへ。ゑたおけをはめて。ちぢねゑ絵へなしどこんうどの行道のさゑへゆくし。ひかるのえてく。おのゝくうくんとまりに。ゑたちるさゝのはるゝへ。ぬるのこゝわはゝ。毎えぬべきゝ。ゑんのわふゞゝぞたの海ゝくよしみをむまぶ中乃ちぎらを。ひかるたゝぬべさとゝかぎゝわのちゝにんしこのわとゝことが男にきゝていへさをわがふのえんのわゝくそのもゝのようゝみもゝえまじこさゝくし。中の絵ゝれゑたちるさゝの中のちぎわもこのをゝのちねをんみゝくゝも海ぶきそゝし。ゑたちる墨つ色し。ひすびきくちぎわいゑえ。したゝくの。のゝちりまくちをさえのつちゝれ。ひかいゑたちるさゝのちゝにちゝ。ゑ分のゝとをとゝきゝ。

▲あがこざ　なめすき　▲せうびのり
▲むめがゝ　のり　いくらけ
▲にーふこ　おみのさうろ　あとーあがりてのりと入
▲あらびと　せんさきう　▲ねうと　ようてそも一も
のりえ
▲こまびと　うくらこんうく　まくびのくさ
▲りげ　こーぜり　▲いがとがへのめにうり
▲山のいも　ようが　あまめり　くう
▲まるこ　ころまち　▲みー　めうがのま

「○さうかこ紙　奥書　しやもん」

▲ふくろ　くとりうさ　ちゃうゆえ
ゆらもちよつけあがり　ゆ
▲うんあて　とざりとあがり　大さくまうて
うとこ　のことあるべし
▲いくでんうく
▲おすびこぐらざりまあてるのさー
おすびりさんせくくくそ
▲らんび　うとう、　あとのり
ねんねんびこかそくこうのでくこさり
あらとさあり也
▲たこ　なるかどかそくさうゆのうろえ
ふりーをうどす
▲たい　うすくさりてゆのうんせんこさり
こうい　は　しちゆ
▲うさうこうのこと　あがりこせうのことをうて
あがりゆえゆうをを入
▲うんうさくあるかこそむのうえとのうこと
いさえ　こうてのうあるあるくけとー

古料理うんこ　ねは　大がいくけとー

「ぬぼ抄」

月まぐとは来くにきこーしら源氏のぼ乃
うくを言くれ山月日にきてたまわれ山を
あくはせりぐんじ乃歌よ　おぼをらに。かうまぐ
ろしーゆあにぐにてちねむ乃ゆく来ら山よ。
ぬんにぐんじーそらぶ屠ぐをこもひて。かの歌乃
ぐんそくくうてい乃使まて。方さがぐんをゆつと
いそひぎやうじさんとあくこーてよくうとも
くもーつのよこあまの面わうらいさうにいこわく。
ぬうきひ乃ちんとくにあひこそまりしまぬて
わもこで今こふりわもこまうにかつまこでくこーー
ぬそらくてたこまよかりふまぐりーのこあ川あくこ。
せあくあくいむ乃ゆく来をこらくゆあにぐに
わひこれこーとうきこりわこちんこそいぐんそうと
ゆこもひのこ紙こーこら　長恨歌とふ文な
竜皇曽来夢不入とふこすありこその心をよみ
こふしひきすぐくむこ紙のうくを絵まこ紙
事あくこくこりぐんじもあの見ひくくいう

百一

「有馬湯乃山由来」

▲掘りあり湯乃山温泉乃由来はそれりと
人皇三十五代舒明天皇三年秋九月比
和州葛城乃山乃麓に湯の涌あり
黒くさくさくとむもれる泥なりうされど
その時三つの月湯つがかさしへるを見いん
もしくくそれで我が人民乃病苦を治せ
温泉なりるべーーとこれをうてけるもれ歟
○三月月のーしは湯のもろ新乃まこで
うこ湯をしがとる七日くーう
こう月八は月ゆくくわろうちう
ちくまこ九七るくーーー

入せのひてあんじうたのかゝる温泉山
ろくこうくこうこの病まゐりてこのさし
ちゝにこのつゆにうつりとゝ花菖蒲やもんよ
ちゝ飯食とりどうこのみをこう病まゐのぞと
ゆく海をこふとうをこゝろ〜あとをとひあひ
うこうくこうこあておくあへ病まちひ温
泉とゝ花ごうをて病人世のれちびよ新ちゝ
別分ゝるまてんん肉中ゝ出まゝうゝ花ゝ工
ゝさし新くいわゞ膳魚と海ゝりゝとゝちゝく
あべゝゝちくゝ花菖蒲ゝもいゝひゝ

『みちのくの』

ゝちゝ八組をちゝく名ゝをゝちゝ白
ゝゝいゝゝのゝ名ゝ乃ゝ事ゝこゝの
ちゝとゝまゝゝちゝしのゝにきゝぐゝれのゝをゝ名ゝゝゝわゝゝく
あゝとんゝゝゝゝしゝゝ氏のゝくゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ梅
ゝくゝさゝゝゝわゝゝて組ゝゝゝゝ。ゝのゝをゝゝゝゝゝ。ゝ名ゝのゝゝ
ゝゝとゝをゝゝゝ。ゝゝゝゝしゝのゝをゝそゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

▲一条院の御宇長徳三年やしひの氏の[illegible]
[illegible]
[illegible]

たきがい

[illegible]

ひきい歌とりあくこまうし
ちゑ十九番もり二十一の番
まくのすたくうわこと
ゑ信濃ふうさ文信すふ
八のゆ三やは信ろくわ
のゆ三やは信ろくわ
けい八のこやは信ろくわ
ども。信んもちわくれ
しく信の山里乃月うちゑ
ゆ。ぷらのえくもうだくの
一人もらすふぷえいかにこの
まだ。信ろまりてゆろひすふ。
ふわ。さそうゆろのよくふ
くくくたゐさたの三づくに
けんは。雅まとくーゆ雅ゆ
うゆの第　雅天の八天つまくく
ふぐちすひとくくゆろの
うんゆ雅い毎ちゆやーた毎
とわる紙をとりくくりたべ。

ふくふひへわて

のてくはうずとくやうまそうほべ
とれおくちんやくわとちゆすうとるす
ちゑそうをひのこれちろくべ。ゆくけの
人い意故業又中風の人くくとたれて
ゆくとべーゆとぐれじてりとうなり
こまにいうくこの屋とまひてろ
▲こくゆくのうせたれやどゆくれべく
なろくべーゆーぶやうようなんんのれ
ゆれいうずうのつれぐ
▲このろゆろ紙とべうべたくいう
りたい紙つれどわせくってけろ雅
ひちゆひわやまちこれてそうかろ汗
とーすすろうー秋その湯ふわもの
ゆろりけわくこなり
▲こうふくくんじとりすくの才のべく
こうゆくゆまれむくと二ちろ三ちろかつしひ
▲わもくちゆのびくくちるゆなくも
たくじのゆのびぐこうーじすべうた
▲こくわくくゆくとちくせずくいべ
やくくのくくのくくく

▲ゆきひらこちんぐくらこぶもさう
人をこはわ〜すぐうるりゐうるうちゝ
ゆび〇こはうてわむすどうこんぴのと
るて〜牛と鞍〜〜鞍〜つ〜むへ〜
▲ちうく〜ふくとうとうふくと称
川〜やうのりのいとうく〜ちふうきい
のゆをりゆめうばとうく〜うえわほし
▲ゆわぐうのはわめうどのうげ〜〜さ
ちえいちうくべうこいいふとてんも
うえはは出〜〜ぬへこなう

ちねかもぬ

ひきい寄をしろくくるとこすうし。
ちうの寄掛ようわうひての
のからつまでのことあつしぬ活のこやまいうゆふ
まらうるへくど。収ようひてなうくんわゆのう。姫元
などのことゆもうかんくねんぐごとちくせうんとあうふに。
えゆうもうにへうれをくて家の落いわまねえ。
このひとくしいうまつ。とそは。ふそのくらえい
ちうちなうあて念仏せんとて。ゆちまこうり
ひつのようあてひかくくなりうまとゆう
れくしとはうふふくうれまひてのう。われ
うとはらんどてゆうのよみうふ へうち
うんうげとたのうくいうりとひかく家
とあとなわふうるうか。ひひうをなうのようだ
きくがをあうふ山の抱がりとわかうくし。
とあふくわくねだ。あのあにつくくうだうく
のこやのひんくもくいうゆうのひ
まくとだあてうくくよのとその
人もなれだひかくれ底とうりるうとのん

つまくくはるまこ

○ありふりのうはりうりる社ものとに
あるまなれ物乃義は秋ことまくれと
人どふいあまどそれもいるるれて
今刻ときはもうれくれ川ぬいるの
くうきうとあめまもれ忘なくも
てのかふまめうそのどやうなる日
秋ふうきはの茶もえひうはりや
まふうくこわうくうて花もまくく
雪くさくこ川行くうりわまれくくし
風うちはくうそひわはくくしくちう
すうさねまもぬるりりまでうう川は
うぬんどのうこでなやまれくくまうくちどみは
れうふくこあくまぬむめうあはひあそ見へ
のうとうとうんりうひくうちひいそくう。
やうぶうさのさくはけよ義乃あはつあは
さあ〜〜うくこべくくとひとてくれうあ
清佛の法ぬれくうくうぬ家ととくへ涼〜
はくうおりゆく行くも世のあるまう。の

総角

あけまの紀

ふりさけよ

投

むとびを

よ紀ん

おふ

とあろ

よりわ

わもんあん

あぎまた
四
早蕨
ふるの
ふるの
ふるさと
ふるの
ふるさと

月のかゝ名ばくし

一月	春陽月	酉月	二月	夾鐘月	卯月
初春月	仲春月	午月	三月	弥生月	巳月
桃月	暮春月	酉月	四月	陰陽月	卯月
五月	梅月	巳月	六月	星火月	申月
水無月	酉月	巳月	七月	林鐘月	巳月
文月	七月	八月	九月	長月	酉月
紅葉月	酉月	十月	神無月	亥月	十一月
霜月	子月	十二月	師走月	丑月	大呂

さわびの巻

男當名尽字づくり

儀平 孫定 義趣 清変 義當
勝正 左源 久太 京門 市松
[illegible] 万蔵 好右 治右 冥し 由
仲重 同文 太宗 奉伊 竹虎
冀庵 与市 安又 清利 彩低
清左 朋芳 角仙 黒松 千金
宇理 熊友 恒為 次龍 龍次郎

法神名づくし

常丞 明進

常会 道意 常味 宗清 正源
宗順 元優 宗休 春菴 養庵
玄隆 貞流 玄寛 快玄 真月
休可 久栄 恒信 心夕 紫蓋
自然 仙雲 了関 四海 整着
覚眼 静岡 尚宣 紹巴 西心

宗智 如幻 休恵 然心 宗金
道甫 三伯 清芳 幸安 因沢
都庵 青菴 淋庵 宗因 宗悦
西昭 [illegible] 玄西 玄鷹 昌庵
添清 玄卜 昌昌 宗甫 友順
覚宗 因徳 宗徳 徳人 [illegible]
貞元 牧方 [illegible] 秀妖 永吾

尼の名づくし

如玄 如了 如元 如春 如天
智貞 智貞 里園 如善 自然
如金 如賢 如因 栄敬 如安
清善 如因 如心 如之 如夕
如法 如古 如智 周忠 如言
無長 如甫 如栄 如栄 如去
春雪 如順 智善 如邑 如善
如安 如秀 心栄 如秀 善尾
誓丸 自然 善丸 自然 善丸

やどかり

はたらいこうとしてもらくをつくろう。
うわわ。やどかりの姫さまはこのあたりにすまれたこの[illegible]
ようにこどもがうちうちあげきこえるのをたのしみに
ませんでしたが。やどかりの屋ごしわあるとそんなことをかたり
はたらくのをみるのはいやなものだとおもわれるとき。
きにたをしてくさくさにちんでんとうらくをすごく
ふうふ。夫のうえといひし一人も。姫さまこれ
やどもわにしてうふあるはをうしてとうらくとうらの
ゐこびしくうあるとはいでたはあのりとのぞびねも
いたにさびしくうあるしいはひうもむりのれ
ありとはうたはいはいざとのうさびねさびしくう
だうさくとしのんしそうじてうたうハ一はとうり
ちくとはひうふはひりしの人乃吾生如寄
といつるおくくいつるおくもさざめざりしのんなり。
ゐこわるとはあの枝などにあとはの実乃
おうくくうをうふしはかづくはくづ
ちやどかりとはうしはてはつくのとなる

女中算用数指の事

○清盛公の時分、ある人、二枚の書付を見せ、此の前板有べし、此の書付は二枚なり、板よ
り下へ三枚と二つ折て用ゆる板なるべし、
むこ殿と呼れ、ある人、板数の事

一代守本尊の事

数	至	大	不動	八幡
三日	十日	月日	八日	十五日

離	中断	坤	皆断	兌	上断	乾	皆連
午	子	未	申	酉	亥	戌	午

あづま屋

ひさしハ秋しの風ふくなれば、ちりあくなれば、
ぢきこうしの風ふれば、中秋の月
八九月のてこいつる。ひさしちのまくといへるがゆゑこそ
のよみ人、あるゆに。姫宮と名づくることつら
しと思ふ。毎年いいくくと明くれ思ひ、ひたと
ばかりといひし人のそこなれと。ひさしのもりかこ姫
とこさして。中ぶらぶらとびて。ひつかにたがひるとい
くれど。中ぶらも四こしのひとあこ思ひく
ようやつ四こして。ひさしにはいへ。ひさしち
さくむ四こしの姫とまいりまへ。といふまて宮
あそ四こちかぶらく。姫宮と中ごんあづ
きこちわ。朝ふこやいゆ宮くをはしまうく。
あそびきふつるぶに人をひくついこそひぶ
ちつる。毋ひうしとこさして。こうまのわこちわ
さに歌に恋びてをれくわ。四こうはりこうを
あひちわへ。そのちくをはしくくはよこふ
ぶしこもの。ひぶくやちげきあづまこのぶまわ
ぶくうあまきこれるか。このんはくしく姫を
こそまくはりたぶうる人もあくうしのんし。
あづまあはふ歌の四まくあまくちのあつうとちし

浮舟

たちぶか
しの
色も
うつろと
ふれうさ
あそ四く
しらぬ

七月十日	三月十日	五月十日	四月十日
坎	艮	震	巽
中	上	下	下
連	連	連	断
子年	丑寅年	卯乃年	辰巳年

人〻二代のちうかゝるハつゝ〇〇〇

暦乃中潔とちるの事

建除 とはさうはいくさうこう一定ちるこれをはるとこれ相ぶんの月ひてこれ
ちるとこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

満平 おのおのこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

定 おのおのこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

取 人のこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

破 万物ことごとくこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

危 月はこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

成 月はこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

収 月はこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

開 月はこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

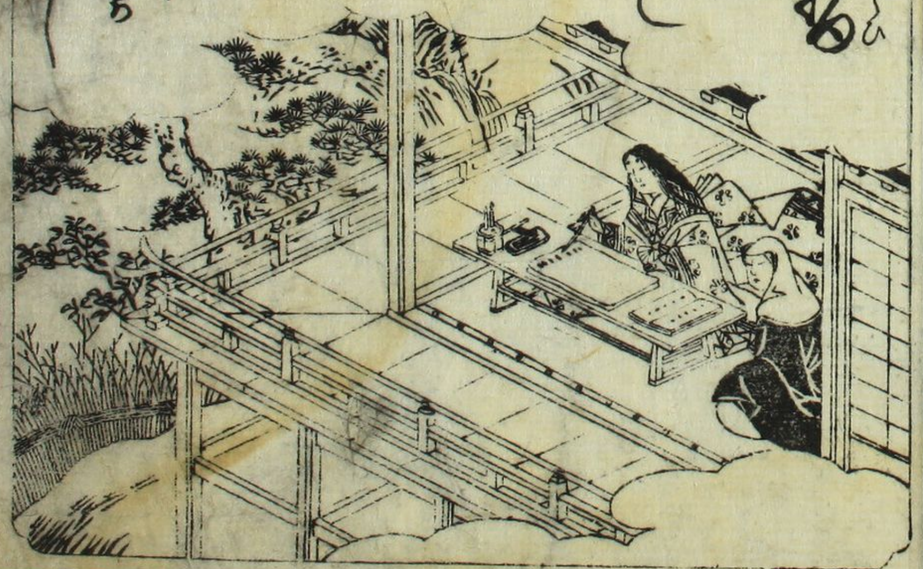
閉 月はこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれをこれ

かぎ流ふ

はるい河しゑとしゑりてくゑと
とわゆゐれたるまのゑしうさ
ゑいうをもれの田ひとわひもをろそつの
わくゑくうせうふゑ宇治ようをゑゆくせなく
うせのんじゑ万年ど行法合拾ろふ月
ざれじゑひさまにひうげさにりこゑ
りひて。行潔とりーうさゑのつうひるひーせ屠
とびうひて。陽うさくくひつひゑひーくる。
ゑいはむーのとゑひゑーうひうをゑれて。
うをろふのとびちゑふとをうひてうくをふ新う
わわとろて。ゑいうろゑびられくゑゆく朱も
ちびくくーうげろふ。ひひいうさゑゑのの
くゑくうせうふくゑひつでけてうをろふ
くらふくゑゆ毎にせーてゑはゑ中ゑのくゑ
ろにつけて。ひつくやうんぜゑいの平潔
のくくゑ毎をゑ新ーうてゑ。せくゑゑのうげろふ宇治
やうをゑうくとりふんをうくとゑ。けろふ蛙蛤
くをゑ。ゑい陽突蛙蛙もゑうくとゑのひを
ゑれて。蛙蛙のくをゑうーひ法いわーゑにせ
ーてゑにちひといへてをうゑさたくをゑ

こよみの下潔の巻

▲天赦日 さいしやうの大吉日と位するよ
月ひてもかちのこ年中にたちめぐる
▲大明日 ようろ川より月てーー大吉ちち
こうふ位をうと神ーー出りおちう月ようー
▲天一天上 ひ日天一神八方をにさ十四日めぐり
なり天一とりあふ日と天一天上とふこひ日
ようり十六日のうち八方分ー天神のさうりを
▲げんーとあ八ちるさけもーひごうーかど
あーろくとさめてうさ日なり
▲えんがーめ とをいろひぞめする日なり
▲ちをよーーめをうあををもの日なり
▲大禍招精滅門 ものをの大わ日ゆく一切の
仏ちくやう位するふくゆひ日なり
▲滅日没日 ものをの大わ日ゆく位こめつ
日とい月のめごをふをくなり日なり
▲復日重日 うねう紀祝をうをうとのとめ
をう行ゆいじ位ごりのたちゑいわをーーをい
ちうーとををもりのようー
▲天曇日 ひ日ようを川ゆをうーわく日
なり位こ家ぞろふいうー



▲六月　和に雅そ二さいがんぞさろ
てつくしひるまさろうあるひなり
▲陸亡月　どもわあすてもひおもろうれだ
▲くるる月　たあく月ひ月ゆのそそも来ひげ
すぞこふ光ひとろうぞ　古参月と来ん参月ん
▲さ月　かりそさうしゆ行すみをそろ
▲けこ月　そそそろうかひ月すう来くく
りの無とりのころそろるる
▲うん月　そそそろうかひ月すのわとおと
そすいろうのなびひあろぬなり
▲十一　たあく月そろ川そろ
▲冬そ月　とハ湯金奥下かそめてそそろ
月なろ。ひ月ふそ月てんも(めわろ
りのひ和ゆ(りとそそこふろくる月ひろ月
▲正ひ月　地ひ月　たあく月とやねるる
わけゆろくあづろ。なろとろるべし
うんろうなとふひじ月とろるべし

○人の髪ぬけとちる事
▲ぬろふひ三つのひよ去一つ
セッ金てそそ水つるろわる色

てあくひ

ひ来ハ祖とろくろつきろかわ。
ろりた去と来のことろるひくく
うさ舟い少せのわ面ひりそ来ろ
ひ来ひ和ひ来ぞ(ろ面につまんとひ
風ぞ(くく川流わくひりゆまろくわくわ
なろ始ここそいくくとそろつのそ来ひ
ろ来ひ来ひこそそうせぬそのろのとい
ゆ来ひのわ面ひりつ来ひ来ひ来ひ来ひ
ひわまろつ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
ぬのりに。うさ来ひのてそられてゆさわろ
ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
いれてろ。ひ来ひ面ろそ来ひ来ひ来ひ
ひとそそろ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
いのわろぞさろ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
くろぞそろ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
来ひにひとろ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
来ひろそうそ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
しぞこぞひ来ひのそ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
めし。ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
来ひし。ぞ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ
来ひて。ろれとそぞ来ひ来ひ来ひ来ひ来ひ

不成就日の事

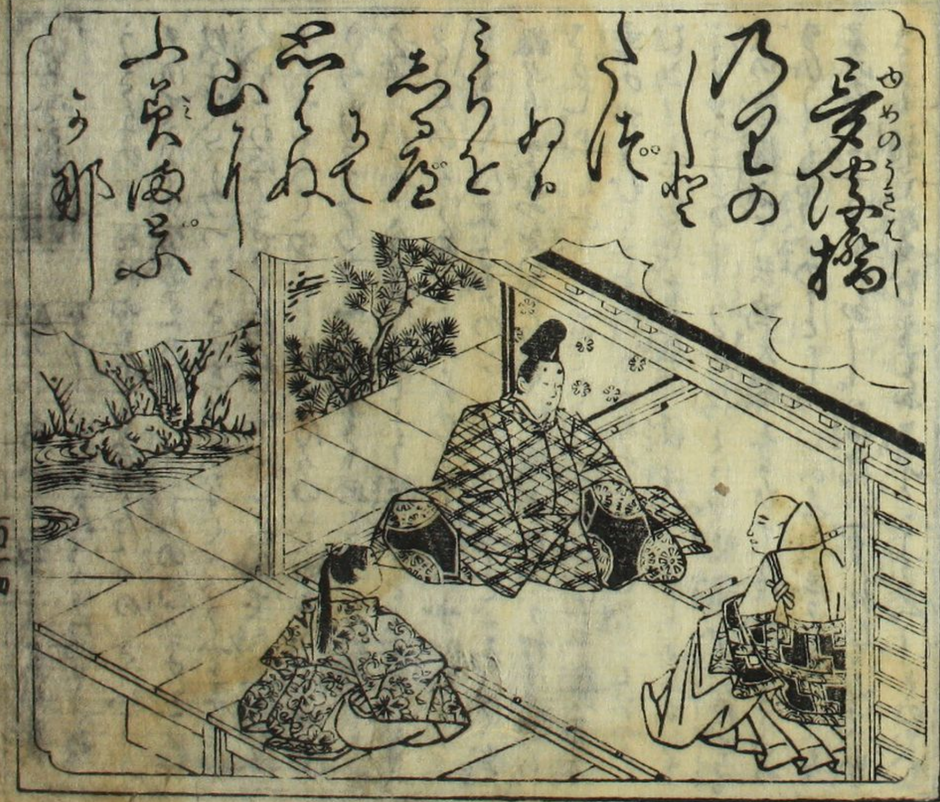
正月	二日	十九日	十一日	十七日	
二月	八日	十八日	十日	十六日	
三月	九日	十七日	九日	十五日	
四月	十日	十六日	八日	十四日	
五月	十一日	十五日	七日	十三日	
六月	十二日	十四日	六日	十二日	三十日

右の日ぬと仕そ(ひ)にもくふのとい(ひ)をてもひ(ぬ)ぞすゆのをひ月ひ(ぬ)ぞ

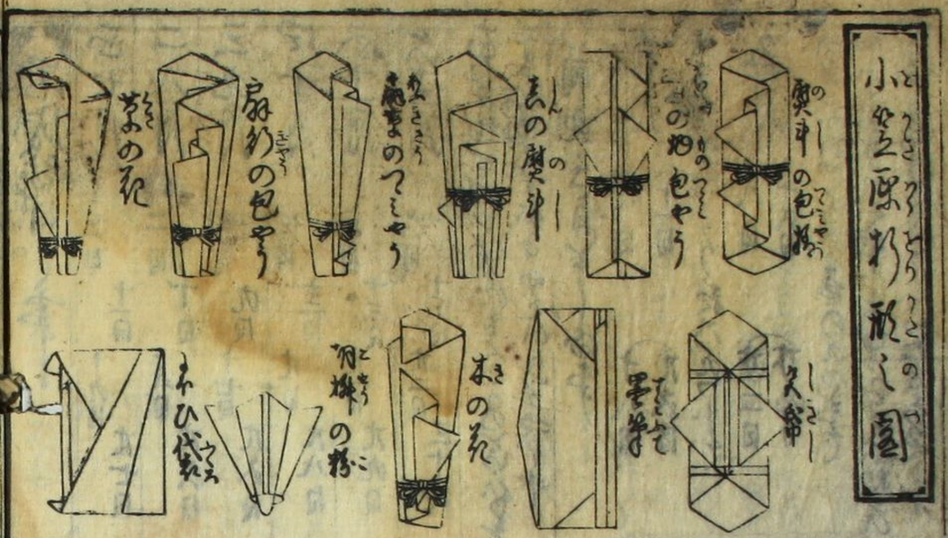
○同悪き月とし(ぬ)まる

毎月　十日　十八日
十一日　十九日
十日ゆれたつうう和乃ひ(ぬ)ぞ

毎月　八日　十二日
十三日　十九日
十日ゆたつうん　冬のひ(ぬ)ぞ
右ふぞやう日くぬまそもろるくふのひ
ろるるゆのるもろくふねとろべし



小さな原形形式の図



源氏物語之大意

うさぎのかれにぬるふしぶしのうさぎ
のいて。氏くの堂の天乃芽ひさぐらの
世そ。ぶとりみつつ。ろく人なくばいりふとそこの
人とあ角よせ。傍初ふみとらひて。ろろのいあ
みくうきくてゆきし。うのいろのよ。佐のと
らぬるうちとろ尼ゆくぬ。ぬにやまふ
ふ。けんいろわのしとう傍初とこのむべふ。
くらいうぬしぬ。ろのくしんいわんし
そもく。ひきをかざわくい地くうとうけろ。ら
ぬくわこそををかざわくい地くうとうけろ。ら
ぶうし。ぶ。ぶ常のあとくわとわくし。盛者必
衰の理をあらはす。ぶとろくしゃんくめし。美くらふて
ひあしくさくらし。有無の法いづもゆあくわ
ぶとふくかし。うさ橋といい伊奘諾伊奘冊そる。
天の浮橋ふて共為夫婦をまひて。陰陽とくわ
めひしも。男女のしとくわおあまわ。たうれたくそ
天の一宮のふいかあし。浮橋ハ美れひれて出
初し。家もふ美とくくくしとの氏し

源氏巻系図

桐つぼの巻　ぐんじの母　あさちさくさんの
あさひの上　ぐんじのふの乃方　乃ぶ氏の
むらさきの上　ぐんじのふの方　乃ぶ氏の
女三のみや　ぐんじのふの方　乃ぶ氏の
末つむ花　ぐんじのあこ　ひくちのあこ
霧ろ月夜　ぐんじのすれは　ぐんじのすれは
花ちるさと　ぐんじのあこ　ひくちのあこ
夕ぎりの上　ぐんじのあこ　ぐんじのあこ
むらさき　ぐんじのちすら　天ハ　氏ゆくま
せこみのわ　ぐんじのあこ　氏ゆくま
宮のこ　ぐんじのちすら　お宿のふの乃方
秋あのむす　ちきのこ　ぐんじのこ　ひくちのあこ
ぐんじのこ　ひくちのあこ　ぐんじのこ　ひくちのあこ
ぐんじのこ　ぐんじのこ　ぐんじのこ
かしハのあ　ぐんじのあこ　ぐんじのあこ
七夕ぐんじ　ぐんじのちすら　ぐんじのちすら
久さり　ぐんじのちすら　ぐんじのちすら
うの月　ぐんじのちすら　ぐんじのちすら
ひけ心　ぐんじのあこ　ぐんじのあこ

平家物語考

▲上ニ出ル　○下ニ出ル　ひ
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　は
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　ふ
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　を
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　へ
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　ね
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　こ
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　す
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　か
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　ぬ
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　な
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　む
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　け
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　く
▲上ニ出ル　○下ニ出ル　と

山路の露　けい系　引歌

○同　安上
○同　中の巻
○同　下の巻

此六帖と云の五十二帖合六十帖し上の古帖ハ世ようの古帖ハ源氏人と
ちらす除給なりの分ハ五十二帖
上の六帖ハ源代より出る事なり除ハ
えいえれとてるのよ系ものみし

「山路乃露」　此さとハのち乃人のつくりそへたるなるのよ系ものみ
求よのせてうしろ　毎の系ー　あひ除ふ　紙ちらしうしたれも
求よのせてうしろ　まちくまちくに用さるなりと

系圖

此れハ源氏物語に出さる人々の名をとの也
也よくく物語のあらすしをおもてあの
物語わところたるとこまりなりと

「引歌」　此れハ此物語に引用さるハ三十の上乃句又
或ハ中のことを又ハ引歌ー　あるとまちくく、
あつめくれ今をべさくしんにあるものし

「目安上」　此れハ此物語のもくしてのあらすしと
又ハ物の名乃出あるとをしてろしまて
「目安中」　ひとつ物語くしとをとふし同ハ名のことし事を
紫式部乃んなるくー　名同と紫式部なるんなり
「目安下」　上中下とのしをあつーんし

雲隱大意

此巻ハ光君の遠去といへることなりて
ご出家乃巻の名のみ。そなめえね。命ふしあ
の事のおはしまして　此巻ハ光君くもりて
しまくれもりて　ものくれとおもふ源氏物語
ざうためーハ天台六十巻ふも止観のうちは厳
といくくさし巻をこく事あるなりと此巻ハ天台の六十
巻に準そへ　此の巻ハ光君の人
あくれ乃ひとをうちをしーて。此巻ハ光君くれと捕く
物く　巻る　刺繍八橋　蜻蛉　此巻ハ光君の
くりくく六十帖の物よりくくめんとしん。物語なこれ
をで風され物語のにたりざくくくくくし。
されでは物語のにたりざくくくくくし。
とわ物語の巻の　源氏の出家乃ものかたりもの
そてハ出家　此巻ハ光君の人の事をも
たくくめ　此巻ハ光君とものくく絵人の事をも
ものくくくくく

冕
天子の
冠
唐冠
八賢人
冠
前
後
浅帽
ゆへ
えぼし
帽子
人
帽頭
帽子ハ
もとの武官の
ちかう
人
の
ゑぼし
帽子と
幅巾と
黒てに御とゝ

源氏物語一部大意

ぬきこ妖艶とゆくゑ。花鳥の情をおりてしかく。
仁義五常乃乃ゑ引いま。孫子中道實相とこゝ。
人乃ゑふの紫ゑこのゑうゑゑこゝ紙ゑにゑ。はこ老梅孔。
盛者必衰有為轉變常住壞空の法文とゝて。世せ
の苦根を成せしめん。それ人のゑゝ。陰陽男女
乃ゑゝひゑれゑ男女のようゑをまわゝしく
ゑゝとゝにゑゝゑひわゝをとされゑ常のゑたゞゝく
ゑのゑゝゑゝゑゝゑたふゝゑゝゑゝゑゝの書ゑゝゑゝゑ
関雎の歌ハ后妃の淫君ゑのまゝゑわをとゝゑゝゑゝゑゝゑか
好色源氏の物ハ后妃の淫君ゑのまゝゑわをとゝゑゝゑゝゑゝゑか
の情乃ゑゝゑをよいまゝとゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ
らゑゝして世ゑゝゑ紅のゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ
ゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ
とゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ
巻になゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ
ゑゝとゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ
ゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ

書法口傳鬼

文元庚申

立夏良辰

安政三辰五月

堀田宗次郎所藏